板鼻城遺跡

市道上町・小丸田線道路新設改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

序

安中市は群馬県の西部に位置し、古くは東山道が通り、江戸時代には中仙道、そして現在は国道18号と交通の要衝として栄えてまいりました。そして近年は幹線道路に沿い、住宅化が進んでおります。

中でも板鼻地区は高崎市に隣接し、地理的条件も良いことから宅地化は著しく進んでいます。こうした状況から既存の道路では住民生活に支障をきたすようになり、今回の道路新設改良事業が実施されるに至りました。しかし板鼻城址は安中市にとっては重要な遺跡であることから、発掘調査を実施して記録保存してゆくことになりました。

今回はじめて板鼻城の発掘調査が行われたことにより新たな事実が幾つも判明し、戦国時代の板鼻城とその周辺地域の歴史を解明するための貴重な資料を得ることができました。時に城の各部の遺構は他に類例の少ない構造が多く、当時の築城法や土木技術を知るうえで重要な資料であります。またこれ以外に縄文時代の住居址も発見され、この場所で原始時代より生活の営まれていたことも明らかとなりました。

こうした文化財は無限に存在するものではなく、今回の調査もいろいろむずかしい条件をのりこえて実施されたものでありますので、今後は社会教育、学校教育の場で充分活用しさらに広く市民への理解を深めるよう努力していく所存であります。

最後に発掘調査に御協力いただいた地元の方々をはじめ、厳寒の中を調査に参加して下さった作業員の皆様には厚くお礼申し上げます。

昭和62年３月

安中市教育委員会

教育長　多胡純策

例　　言

1　本書は安中市（建設部土木課）が行う市道上町・小丸田線道路新設改良事業に伴う板鼻城遺跡（略称E－1）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は昭和61年1月13日より3月31日までの間実施し、遺物整理は昭和61年5月6日より昭和62年2月28日までの間実施した。

3　調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課社会教育係大工原豊が担当し、遺構写真及び遺物写真の撮影、本書の執筆、編集も大工原が行なった。

4　遺物の実測、トレース、拓本は大工原、中島誠（明治大学学生）、小川正子、萩原喜美代、川崎弘子、大和房子、酒井理恵（群馬大学学生）が行なった。

5　中世陶器の鑑定は大江正行氏（群馬県埋蔵文化財事業団）にお願いした。また調査の全般にわたって山崎一氏（群馬県文化財保護審議会委員）より格別の御指導、御助言をいただき、付編については、玉稿を賜った。

6　本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

7　調査の間次の方々に御指導、御協力をいただいた。厚くお礼申しあげます。（敬称略）
桜井七五三造　須藤宏　八巻孝夫　斎藤慎一　竹之内渉　茂木渉　水沢祝彦　野口組

8　発掘調査組織

安中市建設部		安中安教育委員会事務局	
建設部長	大谷順一（昭和61年3月転出）	社会教育課長	茂木勝文
	星野照夫（昭和61年4月就任）	社会教育係長	反町良一
土木課長	矢島武夫（昭和61年3月転出）	主任（社教主事）	森泉寿義雄
	矢野貞夫（昭和61年4月就任）	主任	松本　豊
工務一係長	長沢和雄	主任	萩原　昭
主任技師	佐藤徹也	主事	大工原豊（担当）

凡　　例

1　遺構は縄文時代 1/60 、中世 1/120 を基本としたが、一部 1/200 としたものもある。

2　遺物は1/3、1/6を基本としたが、小型石器については2/3とした。

3　堀の土層断面図中のスクリントーンは粘土及びロームブロックの層を示す。また紙面の都合で個々の層序説明を省略したものがある。

4　石器は大まかな石材により分類を行った。石材A類：黒曜石、チャート等石鏃、小型石器の素材。石材B類：頁岩、硬砂岩等打製石斧の素材。石材C類：安山岩、砂岩等粗面な打製石器には適さず、磨石、凹石等の素材。石材D類：結晶片岩系の石材。

目　　次

本　文　目　次

序

例　言

凡　例

目　次

Ⅰ　調査に至る経過　1

Ⅱ　調査の経過　1

Ⅲ　調査の方法　1

Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境　2

Ⅴ　遺構と遺物　4

1　縄文時代の遺構と遺物　4

(1)　遺構　4

(2)　遺物　4

a　土器　4

b　石器　10

2　中世の遺構と遺物　12

(1)　遺構　12

(2)　遺物　19

a　中世陶器　19

b　その他の中世遺物　19

Ⅵ　調査の成果と問題点　23

付編　板鼻城の構造　山崎一　25

挿　図　目　次

第1図　板鼻城遺跡と周辺関連遺跡　3

第2図　基本層序　3

第3図　遺跡全体図

第4図　J－1号住居址、D－1号土壙実測図　5

第5図　J－1号住居址出土土器　6

第6図　調査区出土縄文土器　8

第7図　調査区出土石器(1)　9

第8図　調査区出土石器(2)　10

第9図　M－1号堀、K－1号戸口実測図

第10図　K－1号戸口実測図　13

第11図　M－4号堀実測図

第12図　M－5号堀実測図　15

第13図　M－6号堀実測図　16

第14図　M－8号堀実測図　17

第15図　西第2郭実測図　18

第16図　調査区出土中世遺物(1)　20

第17図　調査区出土中世遺物(2)　21

図　版　目　次

図版－1　板鼻城遠景　M－1号堀

図版－2　M－1号堀　K－1号戸口

図版－3　M－4号堀3トレンチ　M－4号堀石垣　M－4号堀畝状遺構

図版－4　M－5号堀　M－6号堀　M－6号堀石組

図版－5　M－8号堀セクション　M－8号堀　D－1号土壙

図版－6　西第2郭M－7号溝・柱穴列　西第3郭

図版－7　J－1号住居址遺物出土状況　J－1号住居址

図版－8　J－1号住居址出土土器　調査区出土土器

図版－9　調査区出土石器

図版－10　中世遺物

Ⅰ　調査に至る経過

安中市板鼻地区は近年宅地化が進み、既存の道路のみでは住民の生活にさまざまな支障が生じるようになってきた。そして地元住民の強い要望もあり、市道上町・小丸田線を建設することになった。この計画では板鼻城址の遺構の一部が破壊されることになるので、安中市建設部土木課と市教育委員会との間で協議を行った。

しかし地元住民の道路開設の願望が強く、また計画を変更しても城址を回避して路線を建設することは不可能であり、周囲の景観に対する影響も当初の計画が最も小さいことから、当初の計画路線で市道を建設することになり、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。当初の計画では昭和60年度に市道を建設する予定であったが、昭和61年度に延期し、昭和60年度には発掘調査を実施することになった。

Ⅱ　調査の経過

発掘調査は昭和61年１月13日より３月31日までの約３ヶ月間実施された。路線が260 mと長く、その間に民家も存在することから、３つの調査区に分け、東側から順次調査を実施した。

Ａ区は東端からＫ－１号戸口までの約80mの区間で、１月13日より２月28日までの間実施した。Ｂ区は本丸の北側部分約70mの区間で２月17日より３月５日までの間実施した。Ｃ区はＭ－５号堀より西端までの約 110 mの区間で２月26日より３月31日までの間実施した。

城の堀の部分の調査は底面までが深いことと、予想を上回る湧水及び地面の凍結のため難行した。また堀が深く危険が伴うため慎重に作業を行わなければならなかった。そのため調査は予定より遅れ、３月31日にようやく終了した。

遺物整理作業は昭和60年度は調査と並行して３月11日より３月31日まで実施し、昭和61年度は５月６日より昭和62年２月28日まで実施した。昭和60年度は遺物の水洗、注記、遺構図面の整理作業を行い、その他の作業は昭和61年度に実施した。

Ⅲ　調査の方法

調査は計画路線内すべて板鼻城址内に含まれるため何らかの遺構が存在することが予想された。そのため原則として路線予定地内全域を調査範囲とし、路線範囲内だけでは遺構の性格がはっきりしない本丸北側の堀（M－4号堀）の部分については一部路線外までトレンチを設定して調査を行うことにした。

グリッドは本丸にある三角点（X＝37764.75・Y＝－8119 2.47・H＝169.02）を基準として真北方向を決定し、これに直交するグリッドを設定した。この板鼻城の周辺には関連するとみられる鷹の巣出丸、小丸田曲輪、板鼻古城が存在するので、これらとの位置関係を明確にするため、これらの遺跡を含める形で100 m毎に大グリッドを設定し、北から1・2・3……と呼び、さらにそれを4 m毎にA・B・C……と区分した。東西方向は西から4 m毎に1・2・3……と呼び、100 m毎すなわちn×25＋1（n＝0・1・2……）を大グリッドの区画とした。したがって板鼻城本丸の三角点は5 A－126である。

遺構の調査は原則として表土のバックホーによる掘削の後、人力による遺構の精査を行ったが、堀の調査の場合はバックホーによる覆土掘削も併用した。

記録は水平測量及び土層断面図の作成と写真撮影を主として行ない、遺物は遺構及びグリッド毎に記録して取り上げた。

調査が終了した遺構については危険性が高いので速やかに埋戻すことにした。

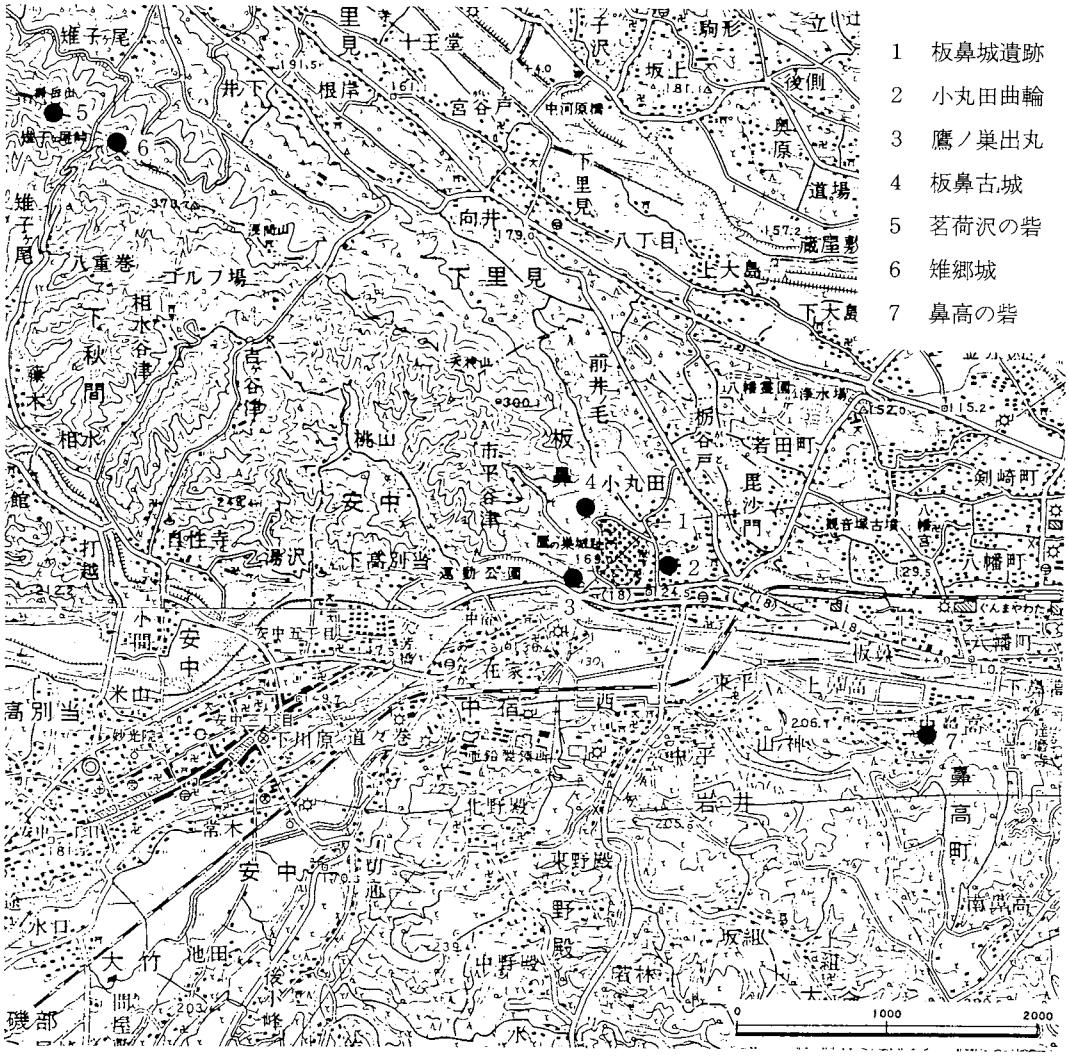
Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境

今回調査を実施した板鼻城遺跡は板鼻城の本丸の北側を通り、城址を東西に横断する部分に位置し、安中市板鼻字小丸田、上町、古城、菅沢地内に所在する。

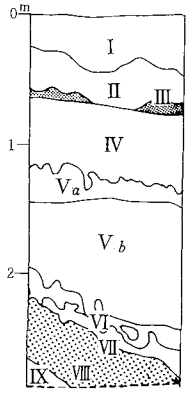
板鼻城址は碓氷川と九十九川の合流点より約1 km下流の北岸台地上に位置する。天神山（標高322.9 m）より南東へ延びる山裾の舌状台地の先端部分にあたり、北・東・南へは広く視界が開ける。またさらに細かくみると城址の南西は蟹沢川が深く谷を刻み、その対岸には鷹の巣出丸が存在する。一方北から東へかけては道場川が流れ、北の対岸には板鼻古城、東の対岸には小丸田曲輪がある。そして北西の天神山から尾根伝いには雉郷城、茗荷沢の砦が存在する。

この板鼻城址の付近は東山道が通り、鎌倉街道との分岐点でもあったことから交通の要衝として戦略的にも重要であったことがうかがえる。また板鼻には中世の文化財や伝説等が多く存在している。

板鼻城の築城時期、城主等については確実な記録はなく諸説があり、1、戦国時代に箕輪城主長野業政が女婿の後閑城主依田光慶に築城させたという説、2、箕輪城落城後、武田信玄が築城させたという説などがある。



第１図　板鼻城遺跡と周辺関連遺跡



土　層　説　明

Ⅰ 層	黒褐色土層	浅間A軽石（ As－A　1783年 ）を大量に含む。現耕作土層。
Ⅱ 層	黒色土層	浅間B軽石を大量に混入する層。砂質である。
Ⅲ 層	褐色軽石層	浅間B軽石層（ As －B　1108年 ）。
Ⅳ 層	黒褐色土層	しまり、粘性がややある。白色粒子が少量混入する。
Va 層	褐色土層	上下の層より明るい。しまり、粘性あり。
Vb 層	暗褐色土層	Va層と類似する。白色粒子を少量混入する。Va・Vb層は地点によっては１層。
Ⅵ 層	黄褐色土層	ローム漸移層。As －YP を若干混入する。
Ⅶ 層	黄褐色土層	ローム層。いわゆるソフトローム層に相当する。
Ⅷ 層	黄色軽石層	板鼻黄色軽石層（As －YP　約 1.3 万年前）
Ⅸ 層	黄褐色土層	しまり、粘性ともに強い、As －YPは全く混入しない。いわゆるハードローム層に相当する。

第２図　基　本　層　序

V　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

(1)　遺構

J－1号住居址（第4図）

この住居址は4L－116、117、4R－116 グリッドに存在する。平面形は方形で、規模は3.3 m × 3.5 mである。主柱穴は4本で、ほかに幾つかの柱穴が存在する。炉址は検出されなかったが攪乱を受けた部分に存在した可能性が強い。

遺物の出土状況をみると南側部分に偏在する。また出土層位は大部分が1層中である。このようなことからこの住居址の遺物は大部分、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。遺物から縄文時代前期諸磯b式期の住居址とみられる。

D－1号土 壙（第4図）

4L－99グリッドに存在する。袋状を呈する土壙であり、平面形は円形を呈する。口径90cm、内径110 cm、深さ70cmである。この土壙は築城の際の盛土の下で検出されたものであり、遺存状態は良好であった。

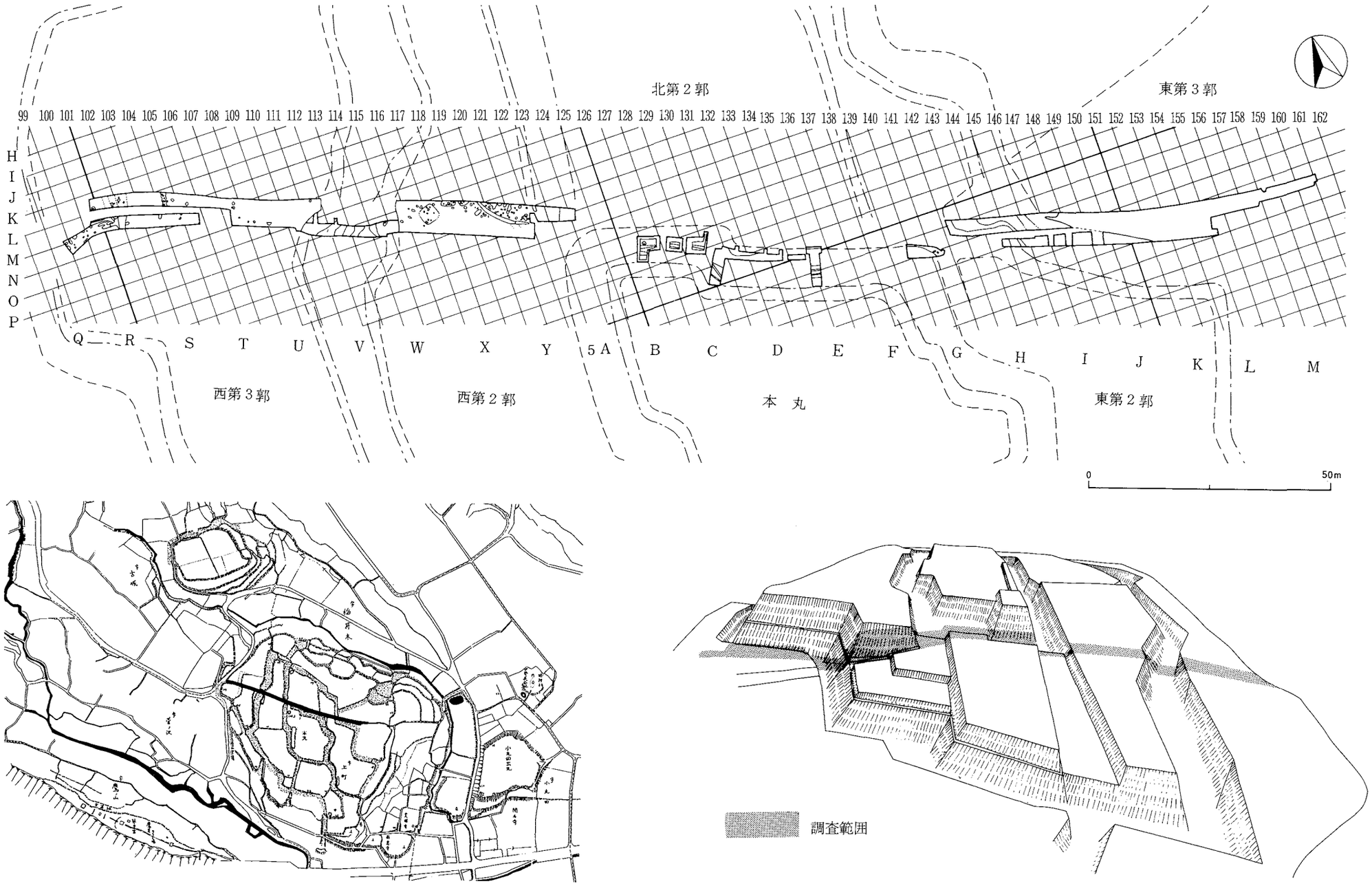
遺物は少なく土器の小破片のほか、石皿等が検出された。出土遺物から縄文時代前期黒浜式期から諸磯a式期のものと思われる。

(2)　遺物

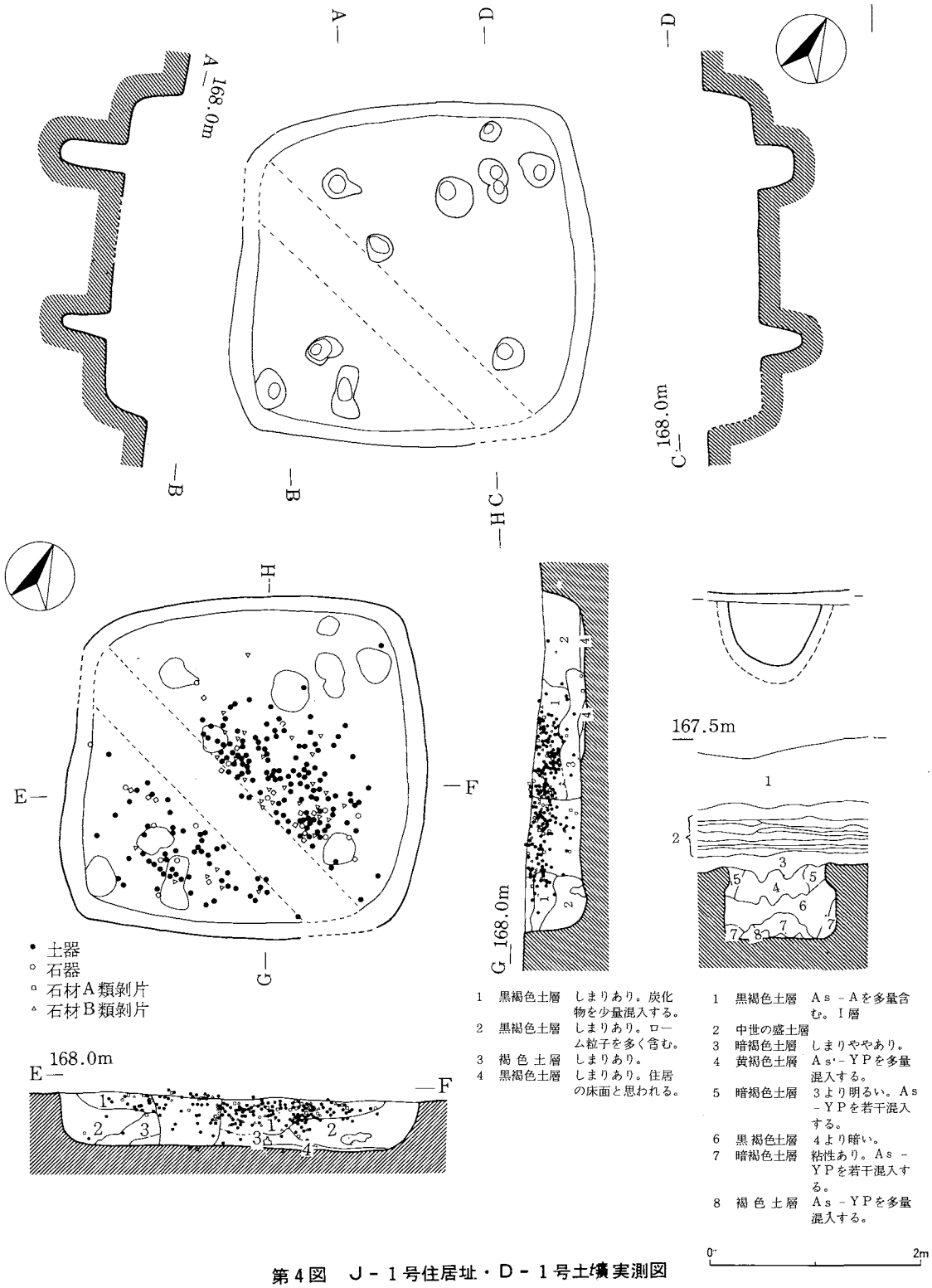
a　土器

J－1号住居址出土土器（第5図）

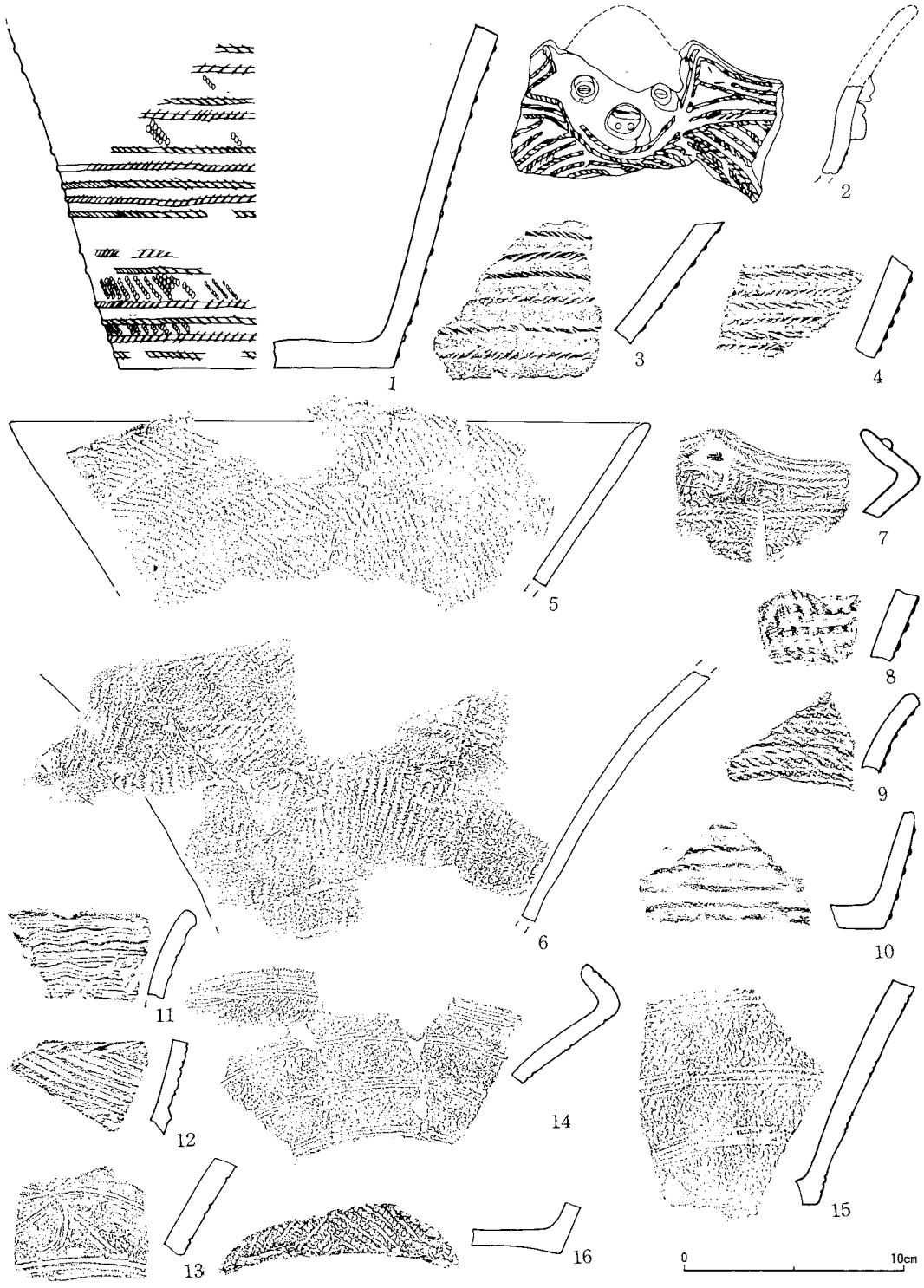
1～4、7は単節の縄文を施文し、浮線を貼付してその上に刻目を入れた文様をもつ一群である。1は深鉢形土器の胴下半部である。2は深鉢形土器の口辺部で、猪をモチーフした文様がつ



第３図　遺　跡　全　体　図



第4図　J－1号住居址・D－1号土壙実測図



第５図　Ｊ－１号住居址出土土器

けられている。7は口辺部が「く」の字形に屈曲しており、波状口縁を呈する。波状部分にボタン状の貼付がなされる。

8、9は浮線を貼付した後に単節の縄文を施しているものである。また10は浮線を貼付したのみのものであり、深鉢形土器の底部とみられる。

14、15は単節の縄文を施した後、沈線によって施文したものである。14はゆるやかな波状口縁を呈し、口辺部は「く」の字に折れ曲がっている。

11～13は半截竹管による沈線のみで施文されているものである。11は平行線文と波状文を交互に施文している。12は横位に綾杉状に施文している。

5、6、16は縄文のみが施されるものである。5は深鉢形土器であり、口縁部は波状を呈していない。無節の縄文が施文されている。6は深鉢形土器であり単節の縄文が施文されている。16は底部の破片であり上げ底となっている。付加条単節の縄文が施されている。

D－1号土壙出土の土器（第6図1～5）

1、2、4は単節の縄文を施文したもので、胎土中に繊維を混入しない。一方3、5は胎土中に繊維を混入するもので、3は無節の縄文を施文している。5は半截竹管の押し引きで施文しているもので、わずかに下端に単節斜縄文を施文している部分が存在する。この土壙からはこれらの土器が混在して出土している。

調査区内出土の土器（第6図6～20）

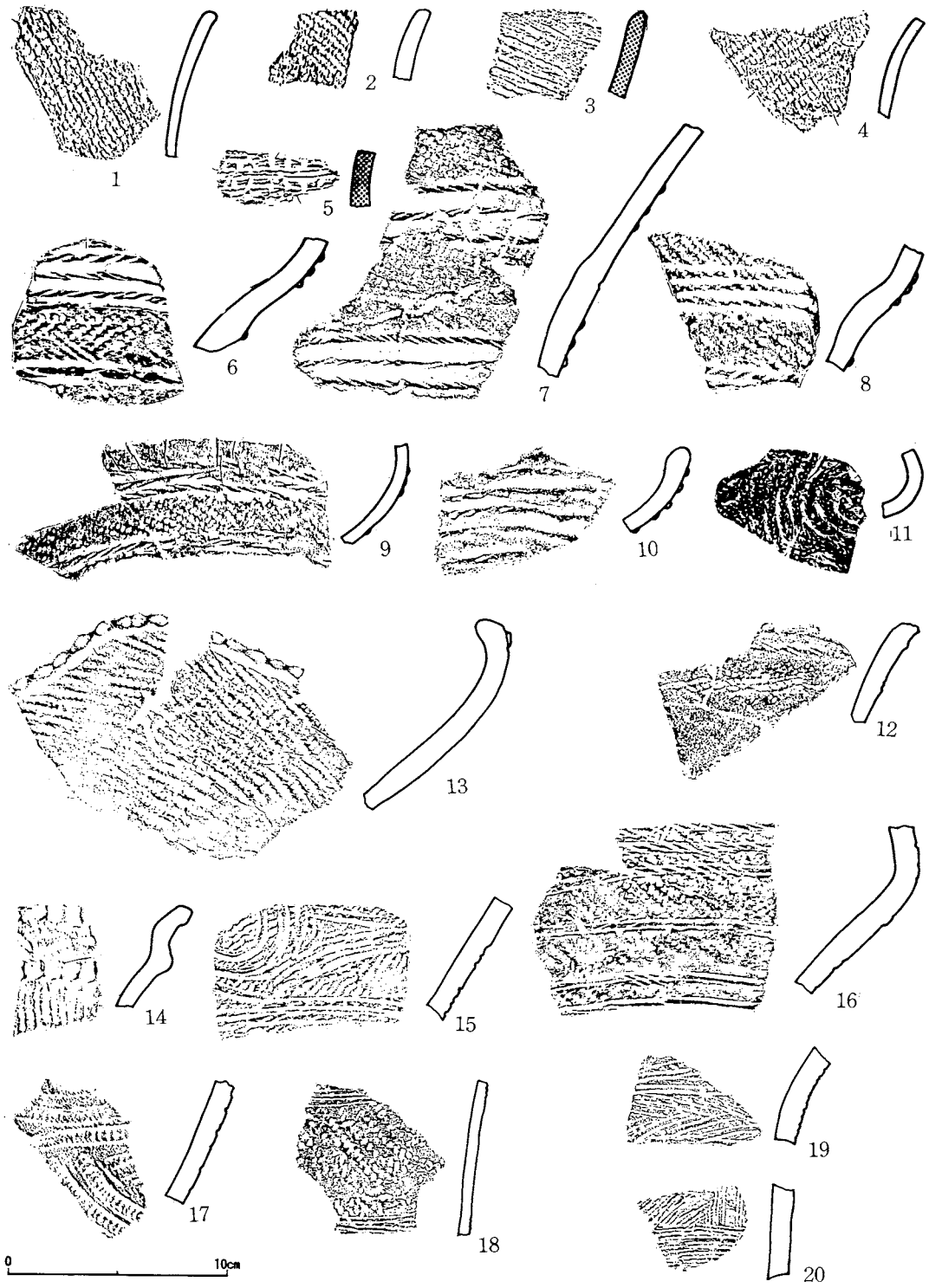
調査区内からは縄文土器が多数出土したが、その多くは城址の遺構覆土中から出土している。特にM－4号堀からは縄文時代の遺構覆土とみられる土層とともにまとまって検出された。これらの遺物は縄文時代前期後半期のものであり、付近に遺構が存在していたと考えられる。

6～10、12は単節の縄文を施文した後、浮線を貼付して刻目を入れたものである。7、12は同一個体であり、地文に結節縄文を用いている。

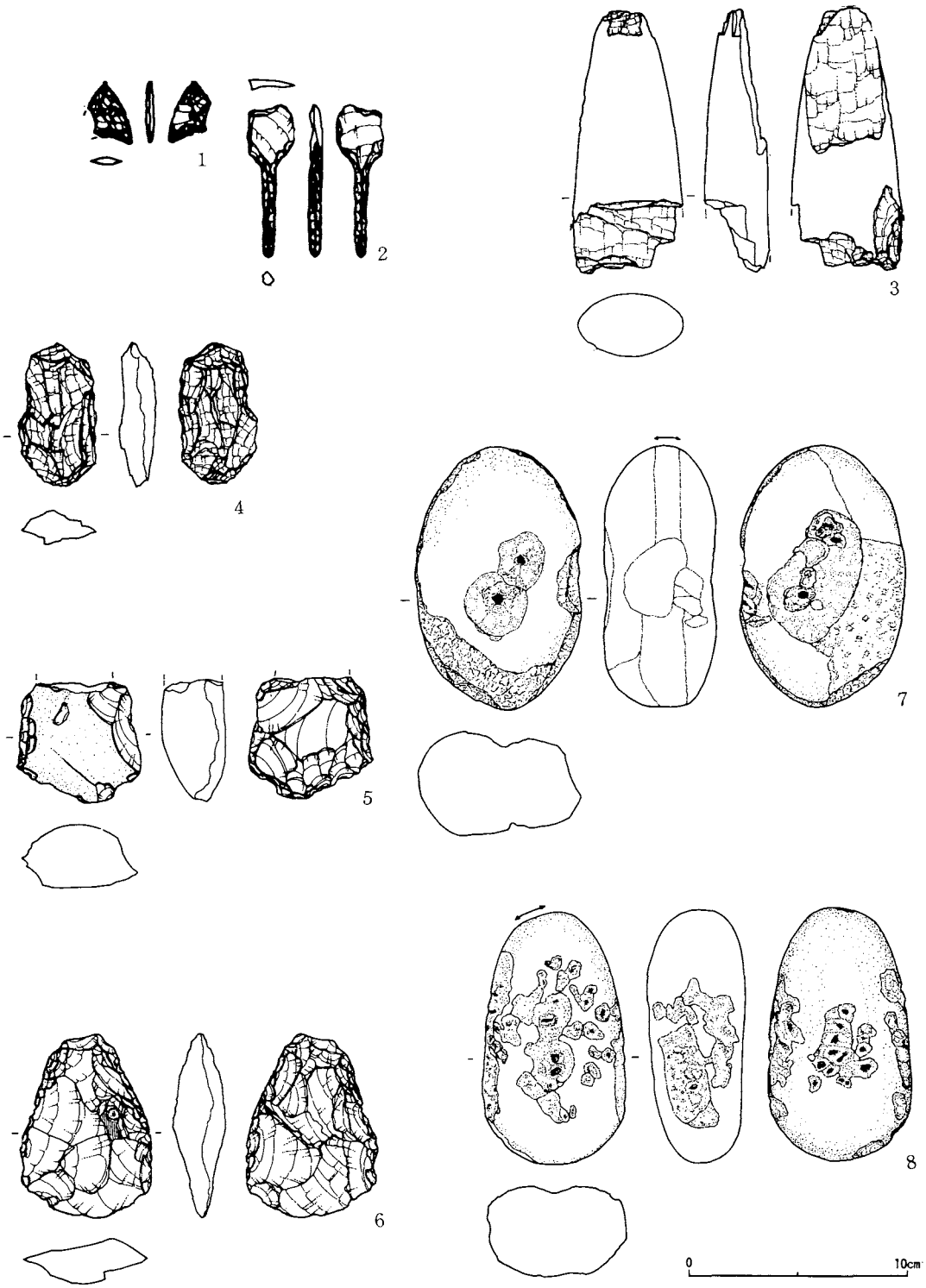
11は浮線を貼付した後、刻目をつけ、さらに先の尖った棒状の施文具の刺突により文様をつけている。

15、16、18は単節縄文を施文した後、半截竹管により施文している。

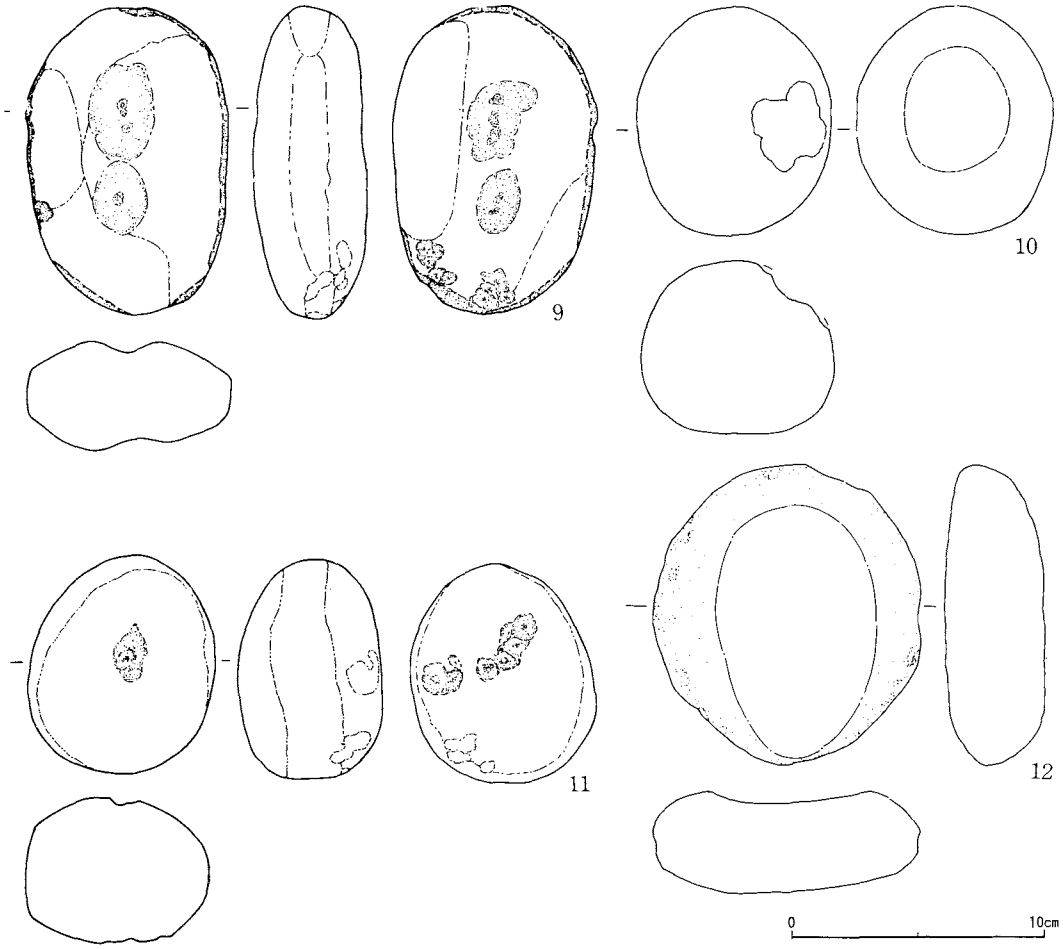
13は波状口縁を呈する深鉢形土器の破片で、単節縄文を施し、口縁部に突帯を貼付している。また14は無節の縄文を施文した後、2段に突帯を巡らしている。突帯は貼付によるものではなく棒状工具により押し出すようにして作出されている。



第６図　調査区出土縄文土器



第７図　調査区出土石器(1)（１.２⅔）



第８図　調査区出土石器(2)（12　1/6）

17は半截竹管の押し引きによって施文されている。19も同様に半截竹管により施文されており綾杉状をなす。

20は細かい沈線が施文されたもので、深鉢形土器の胴下半部とみられる。諸磯ｃ式に属するものである。

b　石器

Ｊ－１号住居址出土の石器（第７図２、４、５、８）

この住居址からは第１表のような石器が出土している。２は石錐である。錐部は長く丁寧に作

出されている。表面がやや風化しており剝離は明瞭ではない。4、5は打製石斧である。4は小型の短冊形を呈するものである。また、5は撥形を呈するとみられる打製石斧であるが、中央部で欠損している。欠損部には再調整が施されている。8は凹石である。楕円形を呈しており、表裏両面に磨面が存在する。凹は敲打によるものとみられ、表裏両面に多数みられる。また側面にも敲打痕が顕著に観察される。

種　　別	器　　種	計
石材A類石器	石錐1　スクレイパー2	3
石材B類石器	打製石斧2　スクレイパー3	5
石材C類石器	石皿1 凹石2 磨石3 台石1 敲石1 蜂巣石1	9
石材A類剝片		20
石材B類剝片		28
石材C類		51
石材D類		3

第1表　J－1号住居址石器組成表

D－1号土壙出土の石器（第8図12）

この土壙からは石皿のほか石材A、B類剝片が検出された。12の石皿は楕円形を呈し、皿面が少し窪んでいる。また裏面には凹が1つみられる。

調査区出土の石器（第7図、第8図）

1は石鏃である。凹基無茎で片脚を欠損している。先端が乳房状に突出するように作出されている。黒曜石製。3は磨製石斧である。乳棒状を呈するもので、刃部が欠損している。また欠損後も使用されたとみられ、上下両端に両極技法による剝離が観察される。7、9は凹石である。両者とも楕円形を呈しており、表裏に2ヶ所ずつ凹が存在する。磨面は表裏両面に観察される。また側面部全周敲打痕がみられる。2点とも安山岩製である。11も凹石である。円形を呈し、表面には1ヶ所、裏面には多数凹が存在する。磨面は全面に観察される。側面部は敲打の後磨っている。安山岩製。10は磨石である。円形を呈し、全面を磨っている。裏面中央部が平担になっている。安山岩製。

ほかに調査区内からは石皿、蜂巣石、スクレイパー等が出土している。

2　中世の遺構と遺物

（1）　遺　構

遺構の概要

今回の調査は城址を東西に横断する形で実施された。調査によって検出されたのは次の遺構の一部である。

1　城の南東から北西へ延びる外堀（M－1号堀）

2　M－1号堀の内側、本丸の北東方向に存在する戸口（K－1号戸口）

3　本丸を囲む内堀（M－4号堀）

4　内堀北西隅より北へ延びる堀（M－5号堀）

5　本丸の西側に位置する郭（仮称西第2郭）

6　西第2郭とその西に位置する西第3郭の間を南北に区画する堀

7　西第2郭の西側に位置する郭（西第3郭）

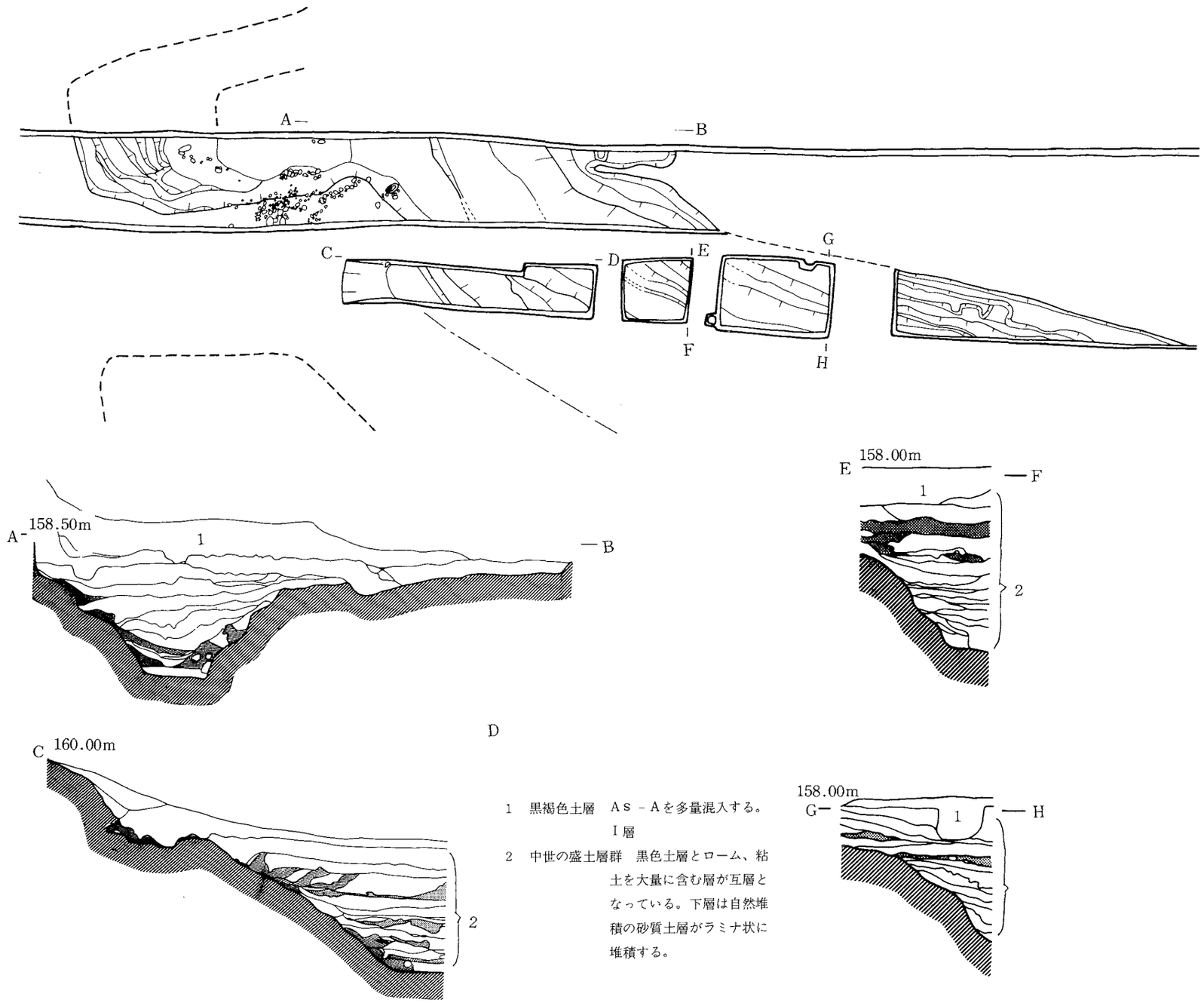
8　西第3郭の内部を区画すると考えられる堀（M－8号堀）

M－1号堀（第9図）

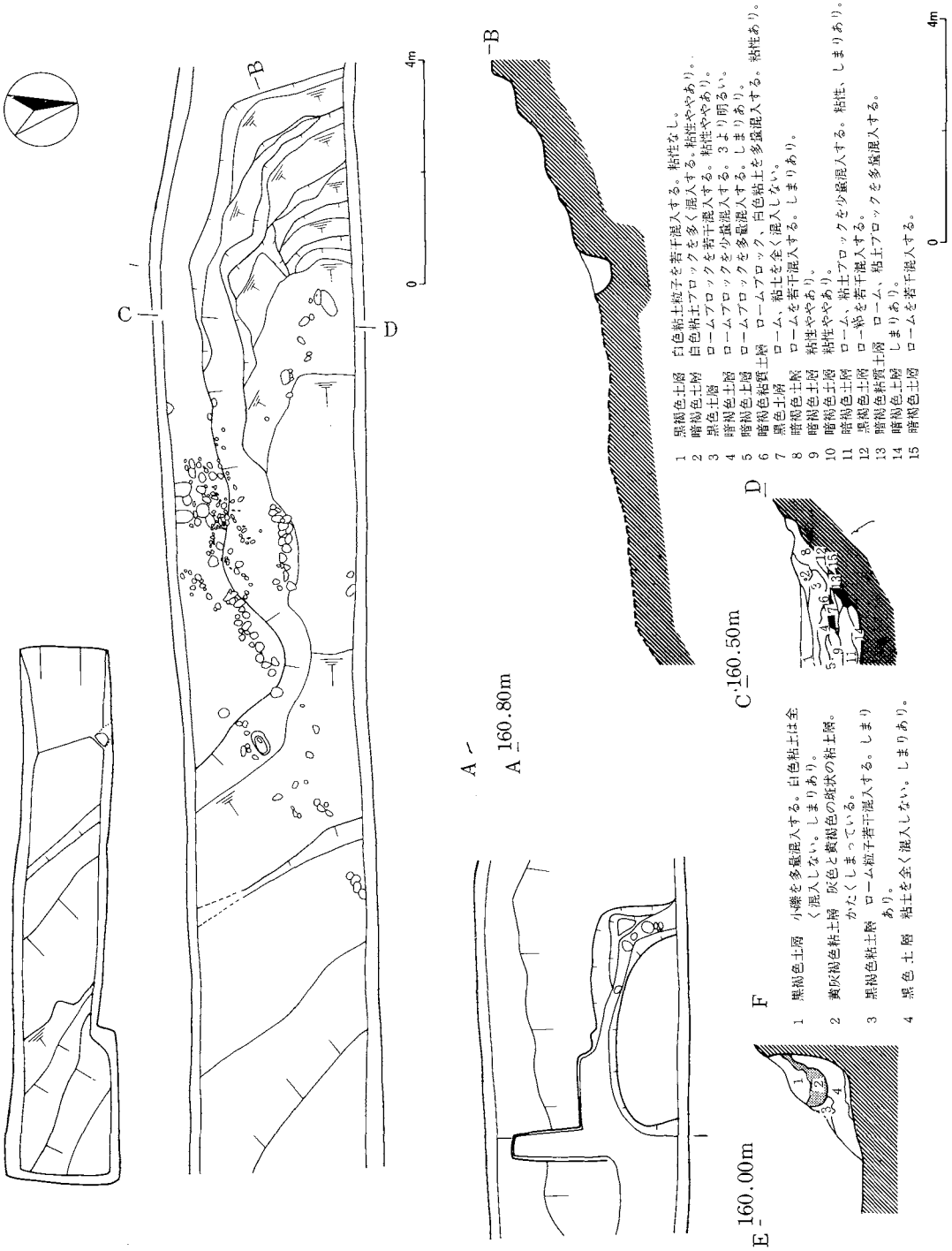
M－1号堀は城址の南東から北西へ延びる外堀である。調査を行ったのは東第2郭と東第3郭の間の部分であり、本丸の北東の方向にあたる。この部分で堀は東から北へ折れ曲がっており、東第2郭と東第3郭を区画している。東第2郭と東第3郭との比高差は約5 *m*である。堀の規模は上幅約9 *m*、下幅約1～1.8 *m*、深さ約3 *m*である。形態は箱薬研状を呈し、傾斜面に2～3段の平担部が存在する。また堀の内側部分には上幅約50～70*cm*の梯形を呈する遺構が帯状に巡っている。

戸口の正面部には堀の外側に溝状の切れ込みが検出された。また、堀の内側には斜めに柱穴が掘り込まれている。さらに堀の外側傾斜面には粘土が厚く張り付けられている部分があり、そこに柱穴がみられるが、地山までは掘り込まれていない。これらの柱穴は木橋の橋脚と考えられる。

また堀の覆土は黒色土層と粘土層及びローム層が交互に水平堆積しており、一度に組織的に埋められたものとみられる。この埋土中にはAs－Aは含まれず、少なくとも江戸時代後期以前に埋められていたと考えられる。一方覆土下層は砂層がラミナ状に堆積しており、調査中も湧水し、水が溜ってしまったことから考えて、使用時にも水をたたえていたと推定される。



第9図　M－1号堀、K－1号戸口実測図



掘り方実測図

第10図　K－1号戸口実測図

K－1号戸口（第9図、第10図）

この戸口はM－1号堀の内側、本丸の北東方向に位置し、5B－142～145グリッドを中心に存在する。真東に向かって「ハ」の字形に開いている。戸口の南側は東第2郭であり、北側の郭との比高差は4.5m～3mである。戸口の南面は第2郭から約50°の傾斜をなしている。そして戸口の開口部から約6mの間は側面下部に粘土と礫を混ぜて貼り付けている。底面は約10°の斜面をなしており、戸口奥部は約20°の階段状の斜面となる。

戸口の造り方をみると、排水用とみられる溝が存在する。また側面に貼り付けられた粘土の裏には砂質の土が入れられており、排水処理が施されている。

そしてこの戸口もM－1号堀と同様に黒色土と粘土の互層がみられ、一度に組織的に埋められたものと考えられる。

M－4号堀（第11図）

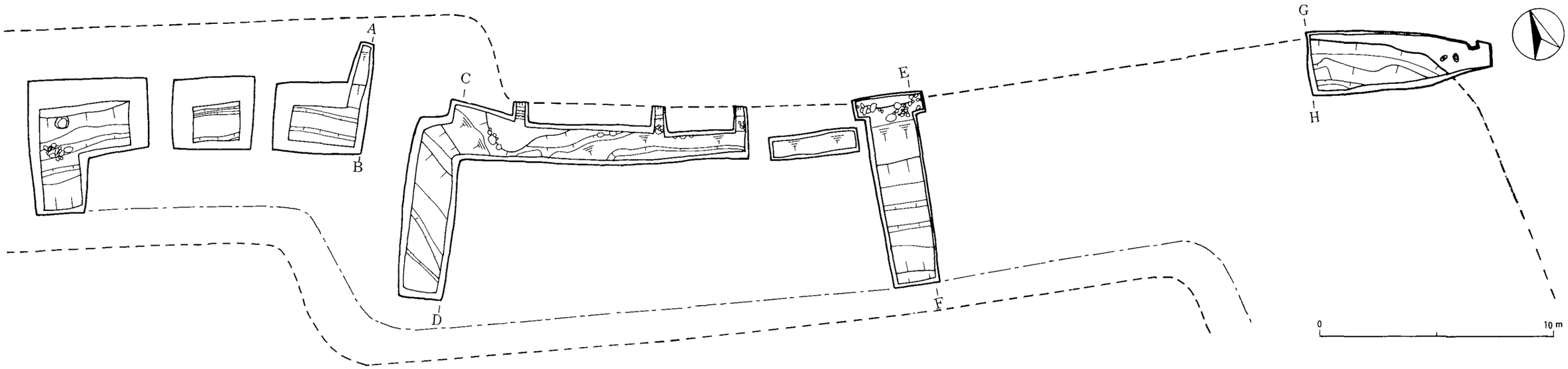
この堀は本丸を囲む内堀である。調査を行ったのは堀の北側部分約64mの間である。東から約40mのところには「折」が存在する。本丸と北第2郭との比高差は約2m～3mである。堀の規模は上幅約8m、下幅約4.5m、深さ約3mである。断面形は梯形を呈し、途中にやや平担なテラス状の部分が存在する。この平担部は北側の方が広く、幅約1～2mである。堀の北側面上部には石垣が存在する。石の積み方は重箱積みである。また堀の底面には上幅約60cm～90cm、高さ約30cmの断面形が「かまぼこ」形を呈する畝状の遺構が検出された。この遺構は堀を掘った後、白色粘土を盛り上げて造られている。そして、この構造は堀ざらいを行った際にも再築されていることが、覆土の堆積状態から観察された。

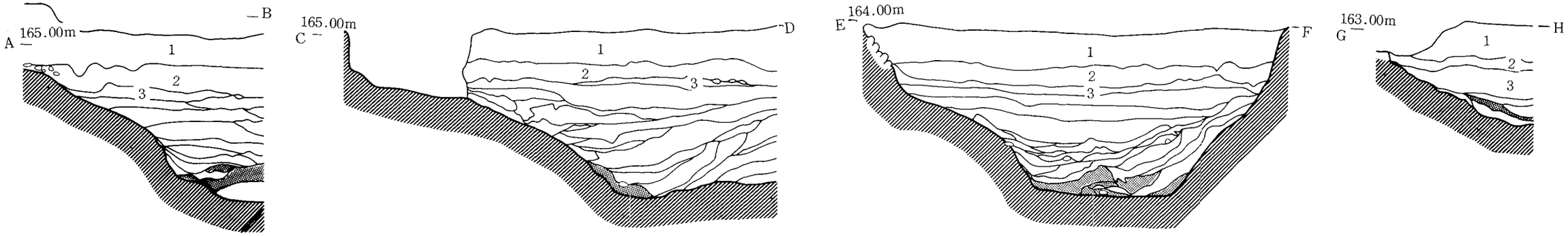
また「折」の東の部分は南へ突出しており、畝状の遺構も急に細くなってしまうことから、この部分に出入口が存在した可能性が強い。

堀の覆土は自然堆積であるとみられる。堀の底面近くでは砂層が堆積しており、この中より杭と思われる加工した材等の自然遺物が検出された。また調査中も湧水していたことから、使用時においても水があったと推定される。

M－5号堀（第12図）

この堀はM－4号堀の北西隅より北へ向かって延びている堀である。この堀に区画されている北第2郭と西第2郭では後者の方が約1m高い。調査はM－4号堀に接続する北側の一部につい

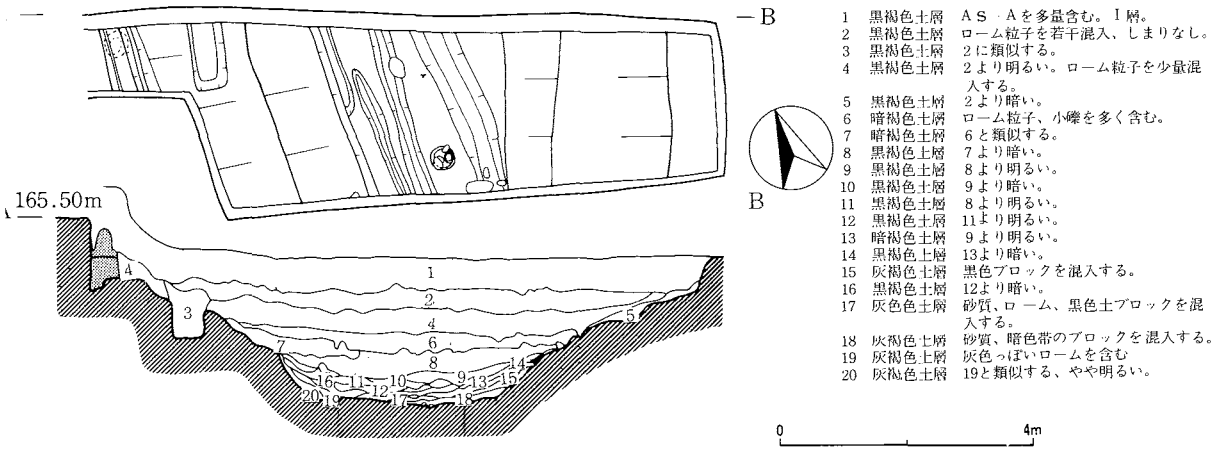




1　黒褐色土層　A ′－Aを多量混入する。Ⅰ層
2　黒褐色土層　1より明るい。しまりなし。
3　黒褐色土層　2より明るい。しまりなし。
※　以下自然堆積の土層　下層は砂質土層が多い。

0　4m

第11図　M－4号堀実測図



第12図　M－5号堀実測図

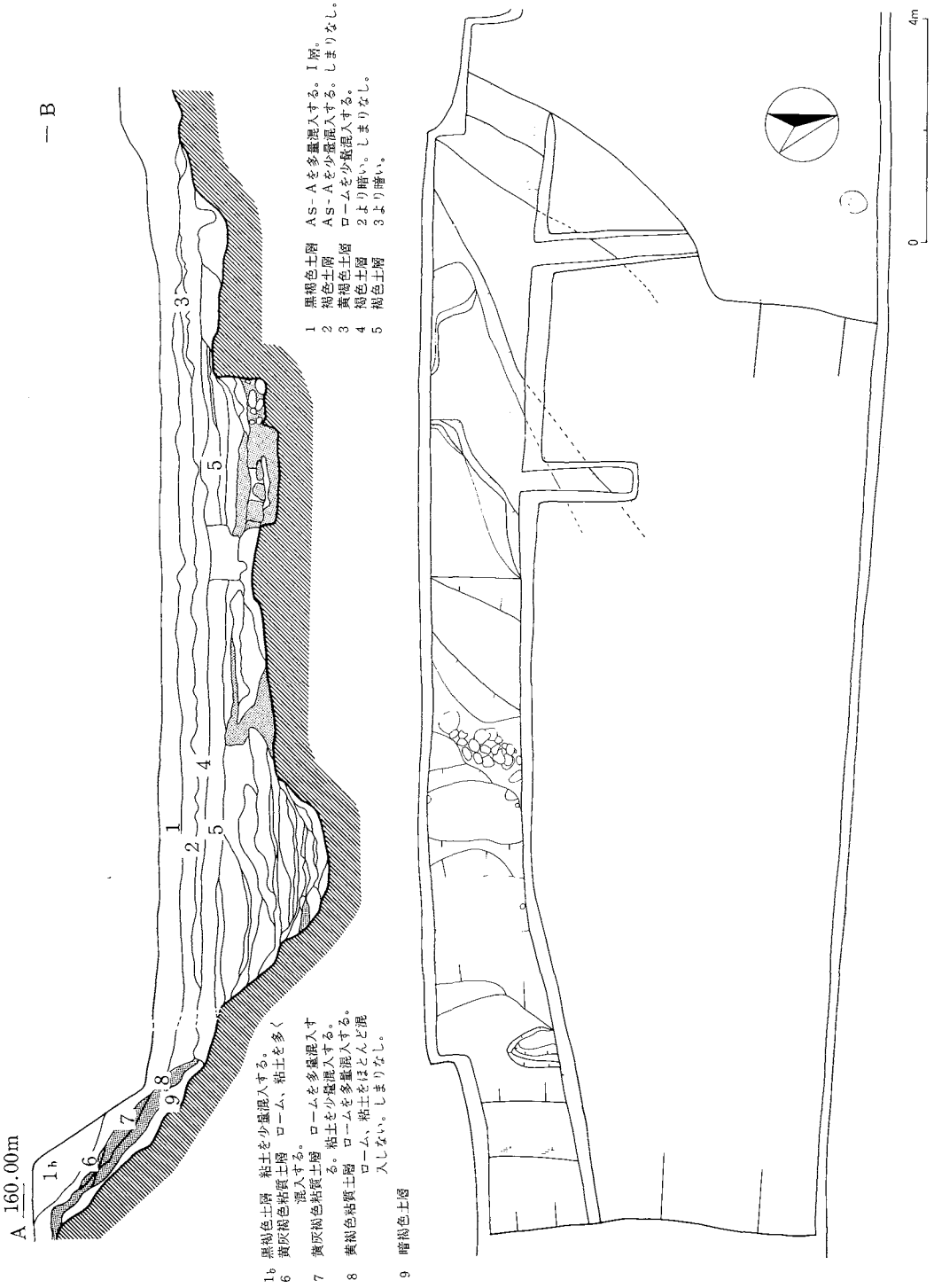
て行った。この堀は上幅約9 m、下幅約3 m、深さ約2 mである。M－4号堀の底面との比高差は約2 mであり、M－4号堀との接続部には段差があったと推定される。堀の形態は浅い梯形を呈しており、両側にテラス状の平担部をもつ。また上幅に比べて浅く湧水もみられない。そして堀の底面は細く畝状に波うっており、橋脚跡とみられる柱穴が存在する。柱穴は直径40cm、深さ86cmで、上部を礫によって塞がれており、中は空胴であった。

堀の覆土は除々に堆積したもので、自然堆積と考えられる。

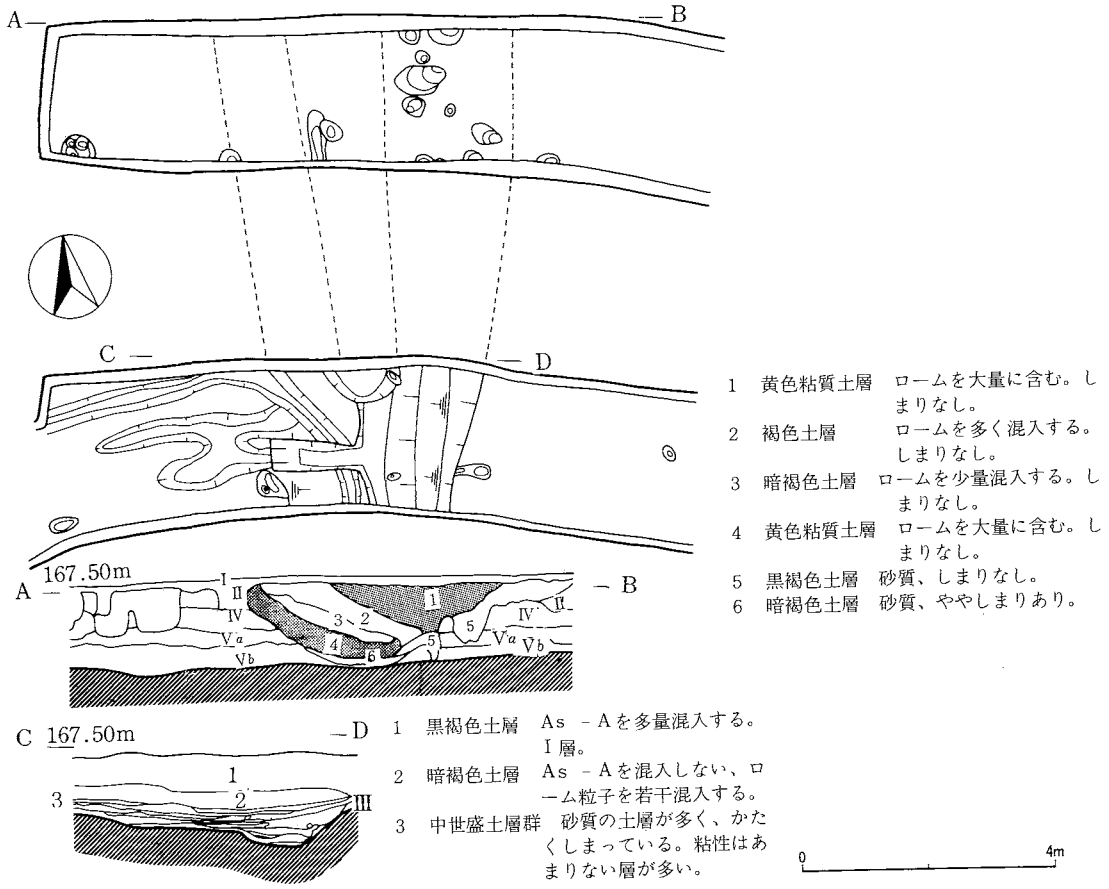
M－6号堀（第13図）

この堀は西第2郭と西第3郭の間にあり、この城の中では最も規模の大きい堀である。調査はほぼ中間に位置する「折」の部分について実施した。西第2郭と西第3郭では約1.5 m前者の方が高い。堀は3段になっており、最も深い部分は西第2郭寄りにくる。調査した部分での上幅は約18m、最深部での上幅約4 m、下幅約2 m、西第3郭面からの深さ約3.5 mである。堀の中間部はやや高く盛り上がっており、その部分に粘土を貼って人頭大の礫を敷きつめた帯状の構造が検出された。また西寄りの部分にも粘土を貼った部分が検出された。これらの遺構は上部構造物の基礎部分と推定される。このほかに東側の斜面中段に地山の粘土を掘り窪めた楕円形を呈する浅い凹みが検出された。この遺構は橋脚と関連する可能性がある。

覆土を観察すると西第2郭からローム質の土が多量流れ込んでおり、西第2郭の縁辺部に土塁が存在していたものと考えられる。また現道の部分にサブトレンチを入れたところ、As－Aを多量混入する土層が遺構面のすぐ上面にまで存在していたことから、この土橋の部分は江戸時代後期以降に造られたものである可能性が高いことが確認された。



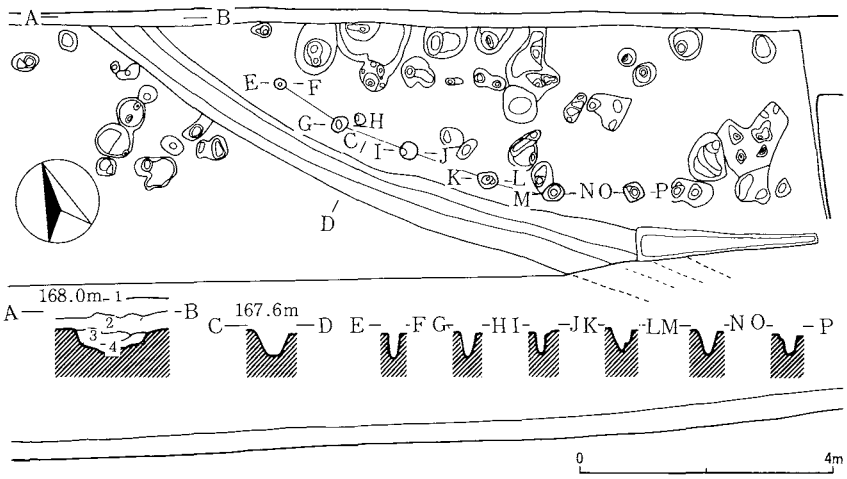
第13図　M－6号堀実測図



第14図　M－8号実掘測図

M－8号堀（第14図）

M－8号堀は西第3郭内に存在し、南北に延びる。この堀は他の堀とは異なる性格のものであると考えられ、調査部分の北側と南側では全く異なった構造をもつ。北側の部分は上幅約4 m、深さ約1.3 mのU字形を呈する堀である。堀の東側面部には不規則にピットが存在する。覆土はロームを多量に含む土によって一度に西側より埋められている。一方、調査区南側は堀は浅く、遺構は複雑な形状を呈し、少なくとも2回以上掘り込みが行われている。南北に延びる堀に直交するように溝状の遺構が存在する。また堀の底面には一段深く掘り込まれた部分が存在する。そして、かたくしまった砂質土層によって覆われている。この砂質土層は細かく水平に堆積しており、堀の西側へずっと延びているので、埋土造成工事の際のものと考えられる。この土層中にはAs－Aは全く含まれていない。



第15図　西第２郭実測図

今回調査を実施した部分は西第３郭が西に四角く張り出す部分のつけ根にあたり、非常に複雑な構造を示すことから上部構造物の基礎工事的性格の強い遺構と考えられる。

西第２郭（第15図）

調査を実施した部分からはM－７号溝とそれに平行して存在する柱穴列、その他多数のピットが検出された。

M－７号溝は幅約60～90㎝、深さ約30㎝であり、弧状に曲がりながら東から北東方向へ延びる覆土中からは土鍋、明銭等が出土している。また、この溝に沿って1.1～1.4ｍの間隔で６本の柱穴列が検出された。柱穴は直径約20～30㎝、深さ約30～40㎝である。この他の多数のピットについては遺物はほとんど検出されなかったが、覆土からその多くは城址成立以前（縄文時代？）のものと考えられる。

西第３郭（第３図）

西第３郭からはM－８号堀以外にはピットが多少検出されたが、調査区が狭いこともあって、規則性を見い出すことはできなかった。また遺物も少量しか検出されなかった。

（2） 遺 物

a 中世陶器（第16図）

中世陶器の出土量は少なく、その多くは堀の覆土中より検出された。ほとんどが小破片であり完形のものは全くない。また遺構の存続時期を決定できるような状態で検出された遺物は非常に少ない。

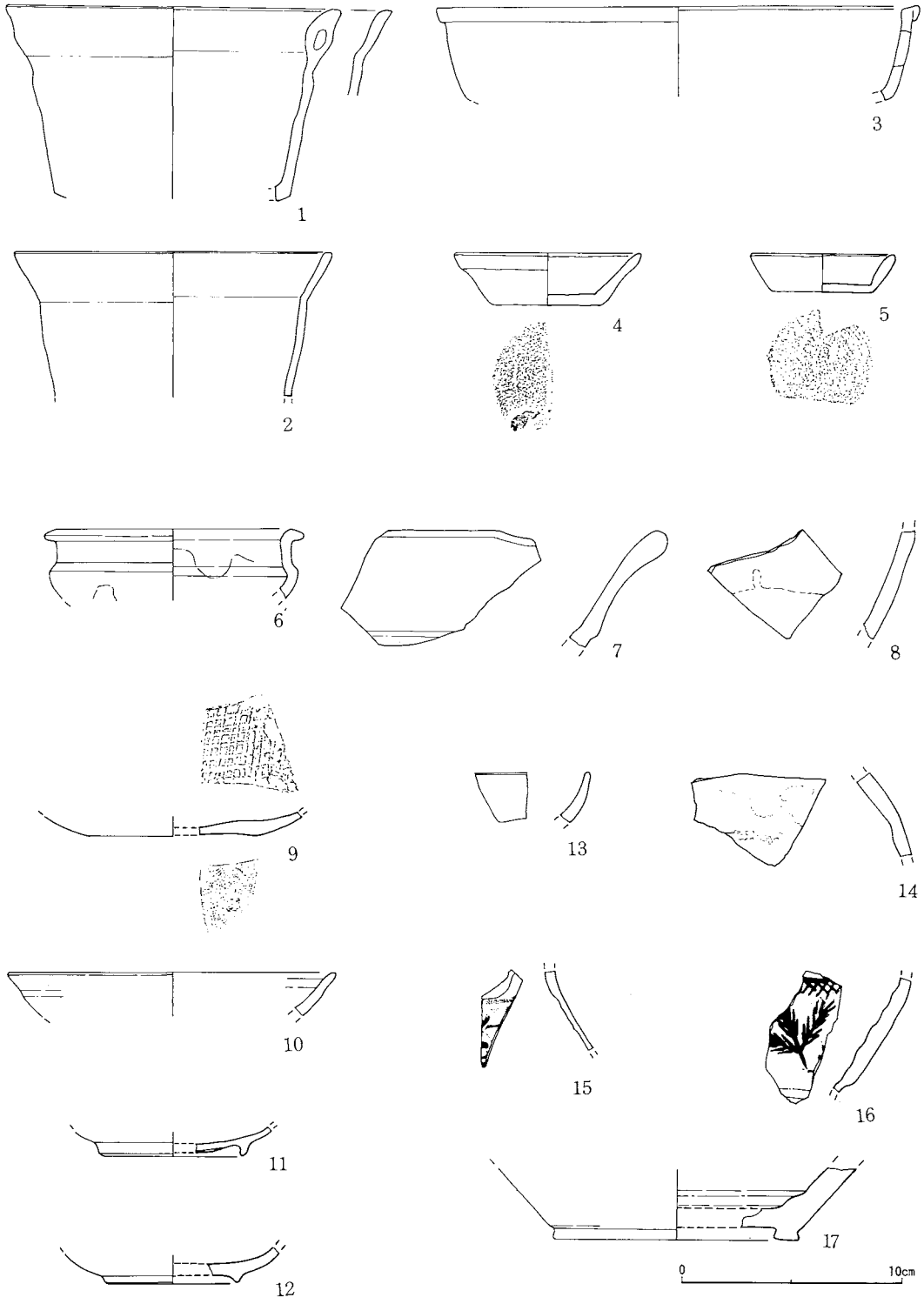
1～3はM－7号溝より出土した内耳土器である。これらの遺物は遺構との関係が明確な数少ない資料である。1、2は土鍋であり、3は焙烙とみられる。内耳土器はこのほかにもM－1号堀、M－4号堀中より出土しており、比較的数量が多い器種である。5、6はM－1号堀埋土中より出土した灯明皿である。灯明皿は他にも出土しており、内耳土器と同様出土量が多い。

6～17および他の中世陶器については第2表のとおりである。

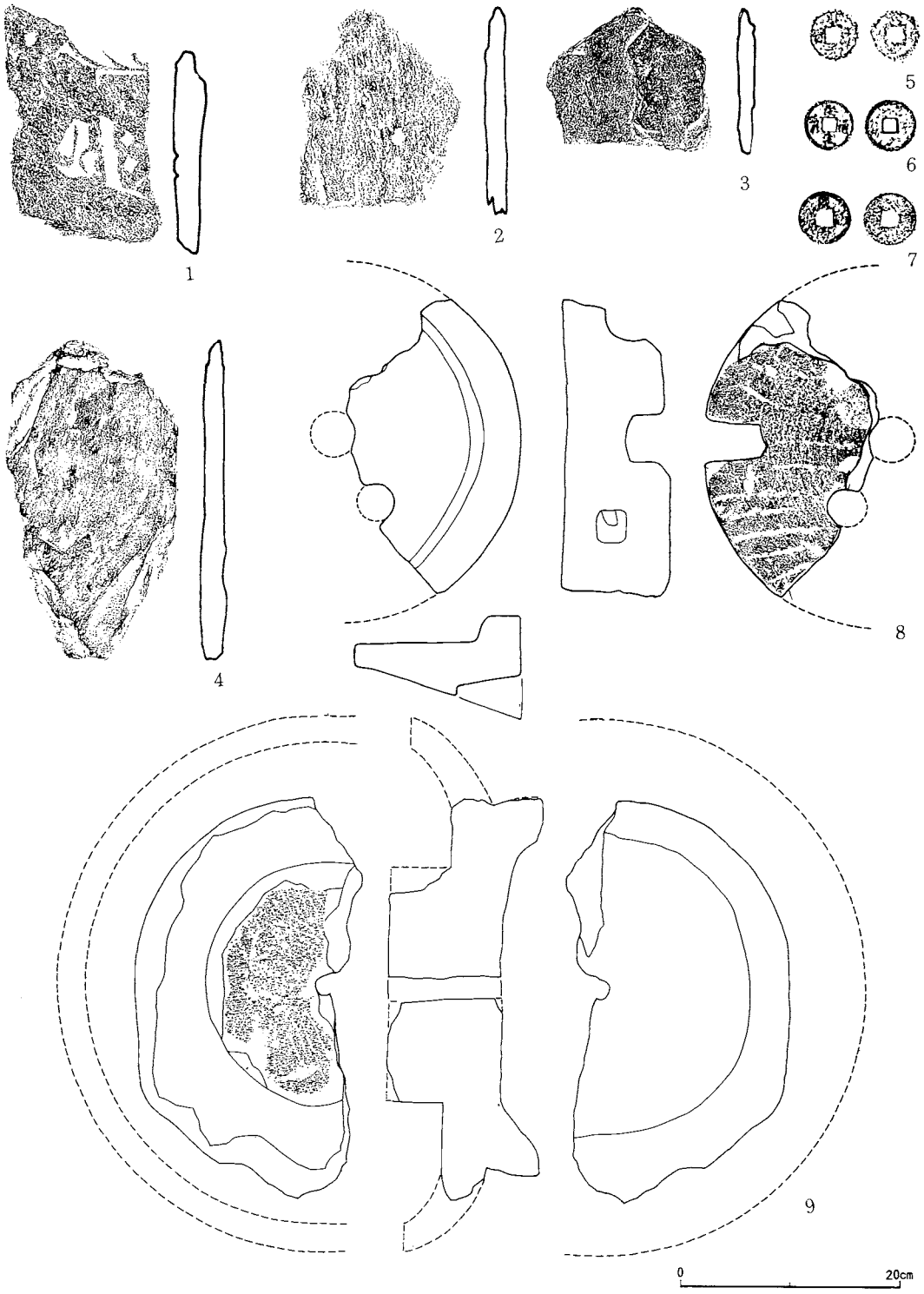
b その他の中世遺物（第17図）

	種別	器種	釉薬等	生産地	時代	出土位置	図版番号
1	陶器	鉢（片口）	焼締	常滑	13世紀	M－1	7
2	〃	耳壺	鉄釉	中国（南宋）	13世紀	3トレンチ	
3	〃	甕	焼締	渥美	13～14世紀	K－1	
4	〃	香炉	灰釉	瀬戸・美濃	14世紀前半	M-1 5区最下層	6
5	磁器	碗	青白磁	景徳鎮系	13～16世紀	K－1 上層	
6	陶器	甕	焼締	常滑	13～16世紀	M－7 1区	
7	〃	平茶碗	灰釉	美濃	15世紀前半	K－1	8
8	〃	盤（折口三足）	灰釉	瀬戸・美濃	15世紀	M－1 2区	
9	〃	鉢皿	灰釉	瀬戸	15世紀	M－1	9
10	〃	耳壺	鉄釉	瀬戸・中国（明）	15～16世紀	M－1 5区上層	14
11	〃	耳壺	褐釉	瀬戸・中国（明）	15～16世紀	K－1	
12	〃	平茶碗	灰釉	美濃	15～16世紀	M－1	10
13	〃	鉢	灰釉	美濃	15～16世紀	表採	
14	磁器	皿	白磁	景徳鎮	16世紀後半	M－1 5区	11
15	陶器	皿	灰釉	美濃	16世紀末	A区 表採	12
16	〃	鉢・壺	焼締	不詳（国産）	中世	M－1	17
17	〃	小袋物	灰釉	瀬戸・美濃	中世	M－4 2トレンチ	
18	磁器	皿	白磁	伊万里・中国（明）	16世紀末～17世紀	M－4 1区	13
19	〃	瓶（長頸）	染付	伊万里・景徳鎮	16世紀末～17世紀	M－4 2区	15
20	陶器	碗（御深井）	鉄絵志野釉	美濃	17世紀	M－5 上層	16

第2表 中・近世陶器一覧表



第16図　調査区出土中世遺物(1)（1～3　1/6）



第17図　調査区出土中世遺物(2)（5～7 ⅓）

1～4は板碑である。1は阿弥陀三尊を刻む板碑の欠損したものである。主尊の蓮台の一部と左脇侍仏「勢至菩薩」を表わす梵字が刻まれている。M－5号堀底面より検出された。2、3はS－1号戸口の埋土中より出土している。4はM－1号堀埋土中より検出されたものである。このほかに板碑は各遺構中より多く出土している。

5～7は古銭である。5はM－1号堀埋土中より検出されたもので「皇宋元宝」と判読できる中国南宋のもので1253年初鋳である。2、3はM－7号溝より検出されたものである。2は「洪武通宝」であるが、3は判読できない。洪武通宝は中国明代のもので1368年初鋳である。

8は石臼である。上臼の破片で直径約33cmである。K－1号戸口より出土している。

9は茶臼である。下臼の欠損したものである。K－1号戸口の石積み上より検出されている。

Ⅵ　調査の成果と問題点

今回実施した発掘調査によって、板鼻城について従来より考えられていたことが、改めて確認されたとともに、新たな事実が幾つか判明した。

まず板鼻城の構造については従来より「螺郭式」の構造をもつ特異な形態の城であり、堀が交通壕となっていることが特徴であると言われていた（山崎　1970年等）。今回は５つの堀を調査したが、このうち本丸内堀（M－４号堀）では底面に「カマボコ」形の畝状遺構が存在することが確認された。またM－６号堀底面において確認された石組みを伴なう遺構は上部に構造物が存在していた可能性が高い。このように堀内に各種の施設が存在する例は多く、その築城主によって異なっていたと考えられる。またM－１、４、６号の各堀には水が存在していたことが土層の堆積状態等から判明した。しかしM－５号堀に水があった形跡はなく、空堀であったとみられる。

また従来土橋が存在していたと考えられていた本丸北西隅の部分については土橋が存在しないことが確認された。そして「折」の東の部分に土橋、或いは木橋が存在していた可能性が強い。同様に北第２郭と西第２郭の間（M－５号堀）にも土橋は存在せず、木橋であったとみられる。さらに西第２郭と西第３郭の間（M－６号堀）にも土橋が存在した可能性は極めて低く、木橋であったと推定される。そしてM－１号堀でも橋脚跡が検出されていることから、この城の築城には木橋が多用されていることが明らかとなった。土橋はほとんど用いられていなかったと考えられる。

またM－８号堀については堀と呼称したが、複雑な形状を呈しており、堀というよりはむしろ構造物の基礎部分の堀り込みと推定される。遺構の位置から西へ開く戸口である可能性がある。

第２郭内部に存在する弧状の溝（M－７号溝）と柱穴列は郭内区画であると考えられる。このままのカーブでゆくと半円形の区画になると推定される。

次に板鼻城の変遷についてみると、M－１号堀とK－１号戸口は同時に組織的に埋め戻されている。またM－８号堀の部分も２回以上の掘り込みが行われている。これらの事実から、板鼻城は何度か改築が行われていることが推定される。

一方各遺構から出土する遺物をみると、板碑の破片が多数出土しているのが目立つ。また中世陶器では13～16世紀にかけてのものが出土しており、時代幅も大きい。このうち多いのは15～16世紀にかけての遺物である。これらのことから、板鼻城が戦国期以前から何らかの活動の場として存在していた可能性がある。

今回の調査ではこのほか縄文時代前期の住居址、土壙のほか、多数の縄文時代の遺物が検出された。特に諸磯ｂ式期の遺物は多く、この部分に集落が存在したものと思われる。さらに古墳に伴なう円筒埴輪、形象埴輪も堀中から検出されており、また「遠見石」と呼ばれる古墳も付近に

存在することから、築城の際、古墳を破壊している可能性が強い。

このように今回の調査の結果、板鼻城の実像を多少なりとも解明することができた。しかし、この城の成立時期および変遷については不明の部分が多い。今後、武田、上杉、北条等、各武将の築城法が明らかになるにつれて、板鼻城についても判明してゆくものと考えられる。

なお、山崎一先生には板鼻城に関する玉稿をいただいたが、紙面の都合で全文を掲載することができなかった。今回掲載できなかった部分については別の機会に掲載することとしたい。

参考文献

山崎一　『群馬県古城塁址の研究』　1970年

近藤義雄・山崎一　『箕輪城址』　群馬県教育委員会　1982年

近藤義雄他　『東山道』　群馬県教育委員会　1983年

中束耕志・相京建史他　『小川城址』　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985年

付 編

板 鼻 城 の 構 造

山崎　一

板鼻城本城の位置は碓氷連嶺の剣ノ峯(1429.6 m)から東南にのびてきた雉ケ尾、天神山など比高（200 m）内外の丘陵列の末端で、南は、岩井附近の高位段丘端との間に碓氷川の流れがあり幅約700 mの隘路となっている。

板鼻の西で碓氷、九十九の両川が合流し高さ5～60mの絶壁が800 mにわたり弧状につづく。これを鷹ノ巣崖と呼ぶが、本城部はそれから菅ノ沢の谷を隔てた東北側の丘上に構えられている。三方に低地をめぐらした西北－東南450 m、東北－西南の最大幅300 mのほぼ楕円形で、本丸面は、南側を走る国道面から40m程高い。

東に低地を挟んで小丸田の出丸があり、その中心部は本丸からの距離300 mを算える。西北にも徳定屋敷の出丸があり、その中心部は本丸から350 m距り、間に深底の沢がある。また西南の鷹の巣崖上の出丸は、本丸からの距離300 m程である。

西北の丘つづきは幅100 mの鞍部を形成し、順の「折」のある堀切りで断たれていた。「折」の北側に戸口が設けられていたのだが道路で破壊されて確認できなかった。そこに近年また新しい道路が設けられ、堀切りまで全く姿を消してしまった。

本丸は、西北－東南の長径100 m、最大幅70mの紡錘形で、囲壕の西面部には一ケ所の「折」があり、南面の部分は直線的で短かく、北面から東面をめぐる部分は三か所の「折」と「邪み」が不規則につづいている。

北面と南面とに戸口があったと思われるが、土橋は認められない。架け橋があったのであろう。

郭面の西縁には高さ1.5 m、幅4 m程の土壇が残っているが、それは西北隅の突出部まで続いていたことであろう。西北の突出部は20m四方の櫓台で、城内全面の指揮所であり、北面、西面とも堀幅だけ張り出しているのでその面の堀内と、土居面を掃射するため絶好な横矢であった。現在ここにある土橋は後代に設けたものである。

東面の横墻状突出部も、側防機能である。

本丸囲壕の、西北角及び東南角と南面西寄りから派出する空堀は、それぞれ城の外縁まで続いているが、各堀の主体は、いずれも途中から左に折れる。南に向うものは基点から50mの所で左に折れ、更に50m進んで右に折れ、竪堀状になって80m下り、南端から少し離れて葬土居がある。堀口が戸口になっていたからであろう。

東南角から出た空堀は、やや屈曲を見せ乍ら50m進み、そこで左に折れて東進し、そこで右に折れ、追手戸口があったと思われる南窓寺境内に向うが、このあたりは破壊が甚しく、原形を捉

え難い。

西北から始まり北に向う空堀は、基点近く架け橋があり、本丸北側の郭から西北城外に向う戸口が構えられていた。この戸口に対する本丸西北櫓からの援護は非常に強力である。

北に向う空堀は、基点から50mの所で、右（東）に空堀を分けるが、その支堀の底は本堀底より1.5m程浅い。本堀は若干進んでから左に折れ、そこで北東に向う浅い堀を分ける。その堀は20m程の所で城外に開き、そこも戸口状になっている。本堀の方は20m西進し、鋭角に南に折れ70m進んだ所で喰違い架橋と戸口が設けられている。この戸口は本丸西北角櫓下の戸口から、西40mの所に当る。戸口から南の空堀は、65m直進し、45度の角度で折れ、15m程西南にのびて、高さ3mの崖下に下る。そこから東南に向って崖下を50mつたい、南に折れて城外に向う。その部分は長さ15mの竪堀になる。堀は更に崖下に添って70m程東南にのび、本丸堀から南に向う空堀に達していたように思われるが不確実である。

本丸西北角から北に向った堀から東に派出された支壕（東北堀と仮称）は途中「屏風折り」の形を示しつつ東南に220mもつづき城外に開いているが、中程の所から東北に向って長さ100mの堀（水の手堀と仮称）を分岐する。その堀の東北端部は拡大し、懐の広い戸口を形成する。この戸口とそこから西北170mにある戸口は水の手口であろう。

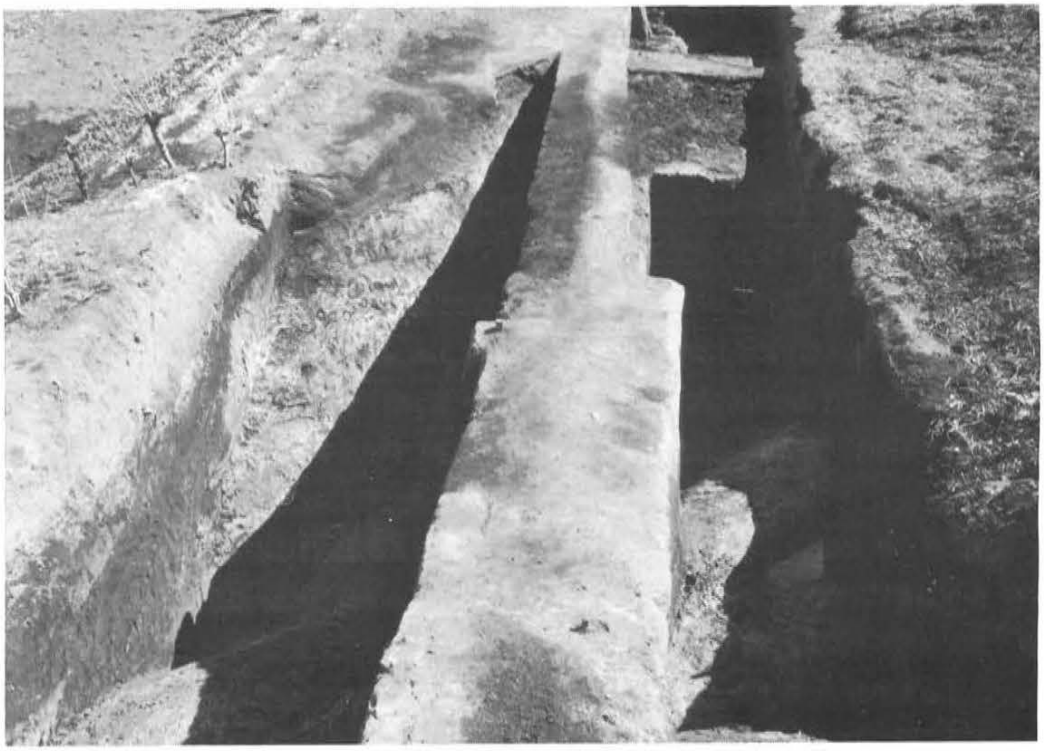
東北堀から水の手堀が分れる所の南側に、石積みを伴った竪固な坂戸口が存在する。南からの横矢が極めて強力にその戸口前に指向されている。この戸口から、本丸西北外側の戸口、更にその西40mの戸口を経て、西北堀切りの搦手戸口につづく経路がこの城の郭面を通る只一つの作戦路で、今次の発掘調査はほぼそれに添って行なわれたのである。

以上、この城の構造を説明するのに、他の城館址のように郭別に追って行く方法と異り、空堀をたどって進めたのは、板鼻城の構造が通常の囲郭式でなく、勿論並郭構造も示さず、堀の配置曲折を以て経始の主題とした特殊なものだからである。北西の掘切りを除くすべての堀が交通壕で、城兵は防戦、出撃の行動に主として壕内を躍進するように計画されていて、城外から各壕内を見透されぬよう、堀を巧みに屈折施回されていて、一見螺旋状とも言える形態を示している。そのため、本丸以外の各郭面は不羈な形状、分布を呈し、内外、主副の判断もし難い。

城郭研究の便宜上、その分類を行う時、通常、郭の配置によって囲郭、列郭等の区別を用いているが、この城のためには螺旋壕式とでも呼ぶ一類を置かなければなるまい。

このような、城郭の戦闘には、城兵間でも相互の通視を欠く場合が多く、本丸西北角にあったと推定される櫓（天守閣の性格を備える。）は、全城内から望見でき、そこからの指揮連絡が城の死命を制することとなる。また城内に侵入した寄せ手は、各郭に分断されて相互の連絡を欠き壕内を躍進すれば郭面の城兵から攻撃を受け、本丸に達する以前に多大の損害を受けるであろう。

板 鼻 城 遠 景



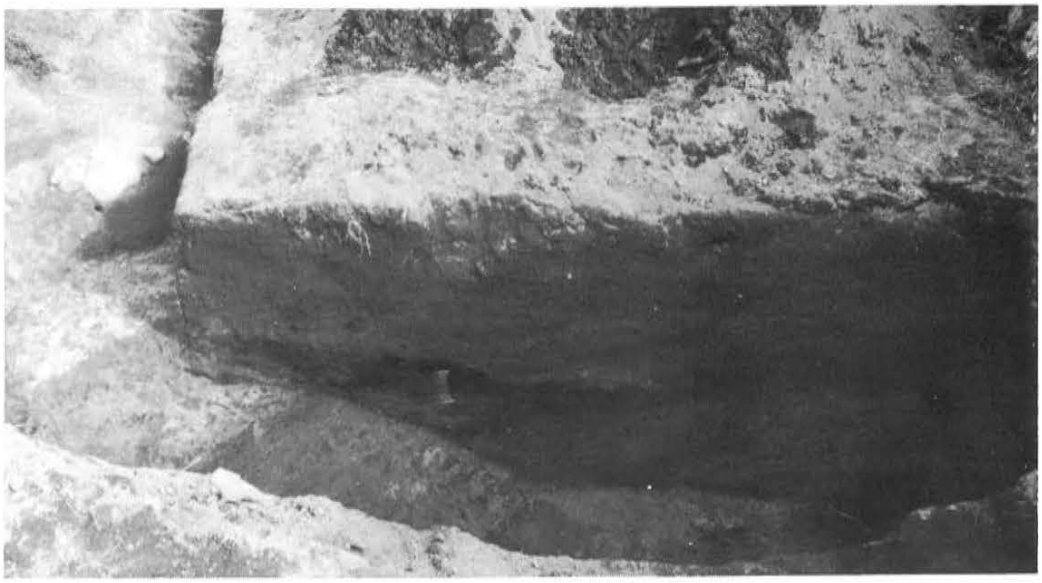
M - 1 号 堀

図版— 2

M- 1 号 堀

M - 1 号 堀

K - 1 号 戸 口

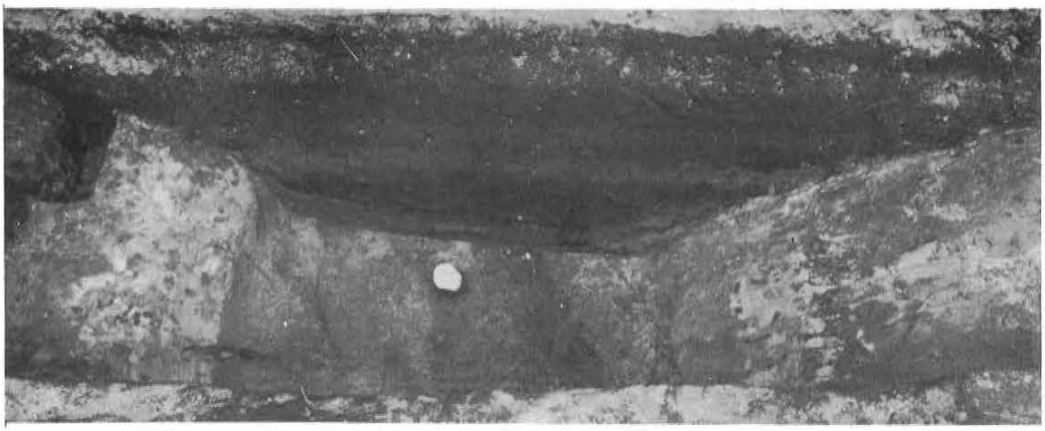


M－4号堀3トレンチ

M－4号堀石垣

M－4号堀畝状遺構

図版— 4

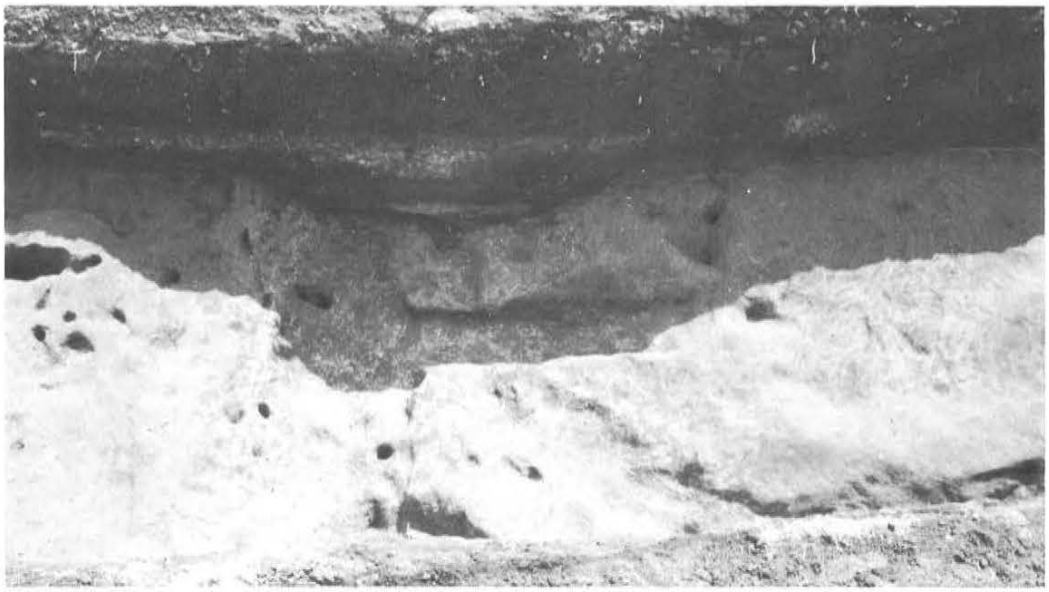


M - 5 号　堀

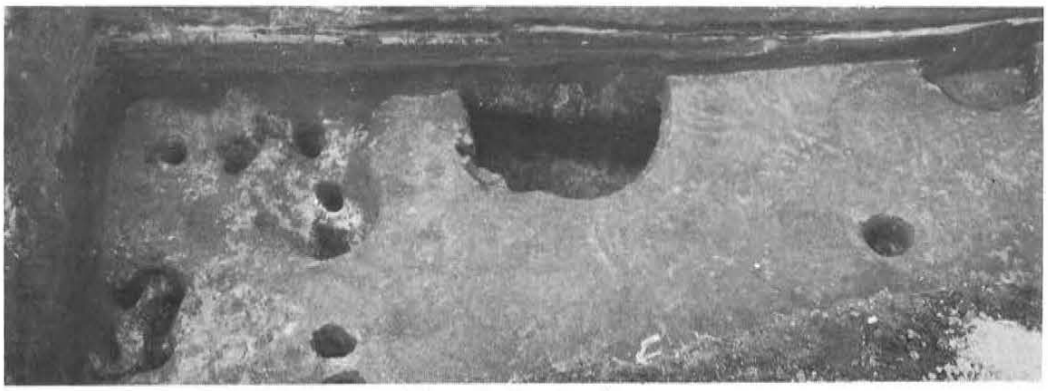
M - 6 号　堀

M - 6 号　堀石組

M－8号堀セクション（北側）



M－8号堀（南側）



D－1号土壙

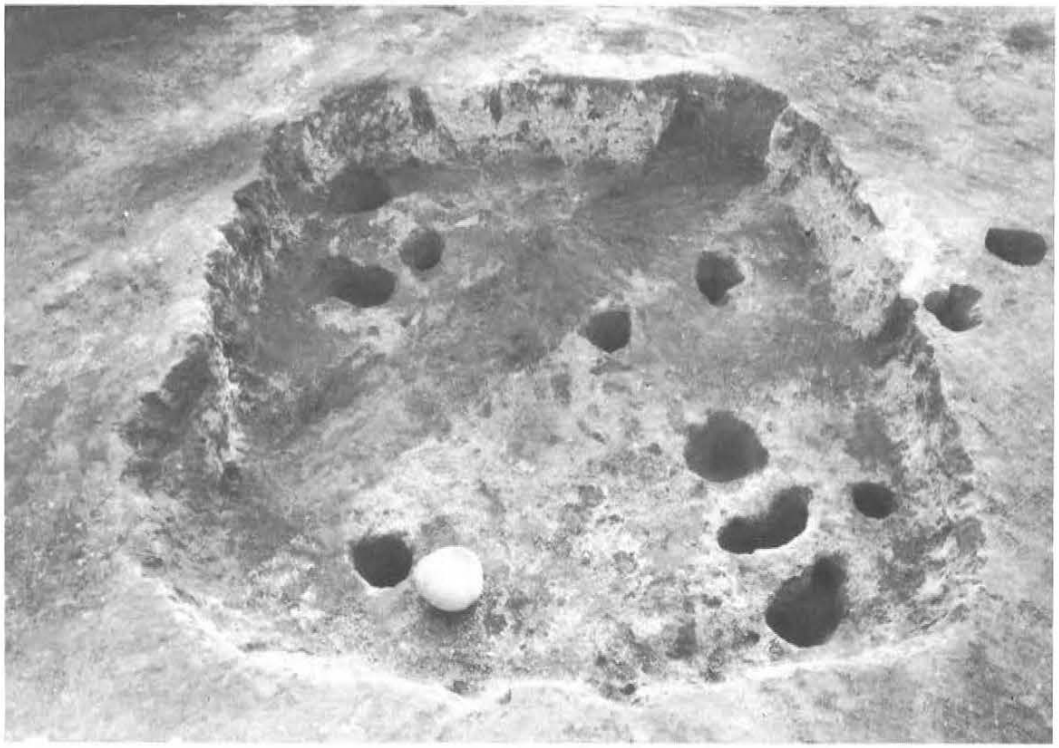
図版—6

西 第 2 郭
M－7号溝・柱穴列

西 第 3 郭（南側）

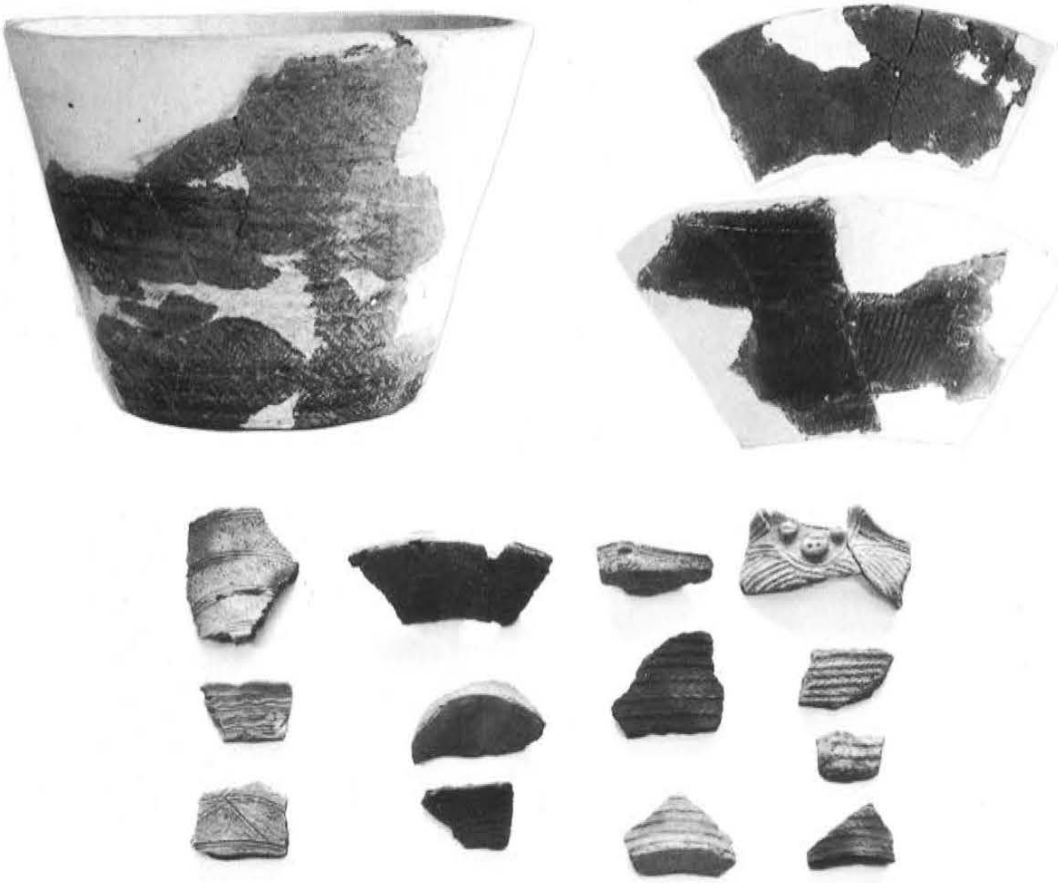
西 第 3 郭（北側）

J－1号　住居址遺物出土状況

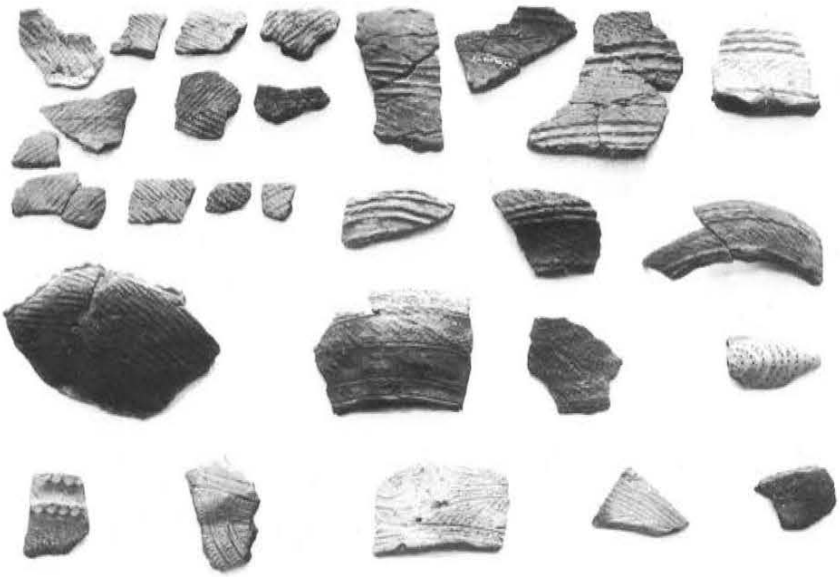


J－1号　住　居　址

図版—8



J－1号　住居址出土土器



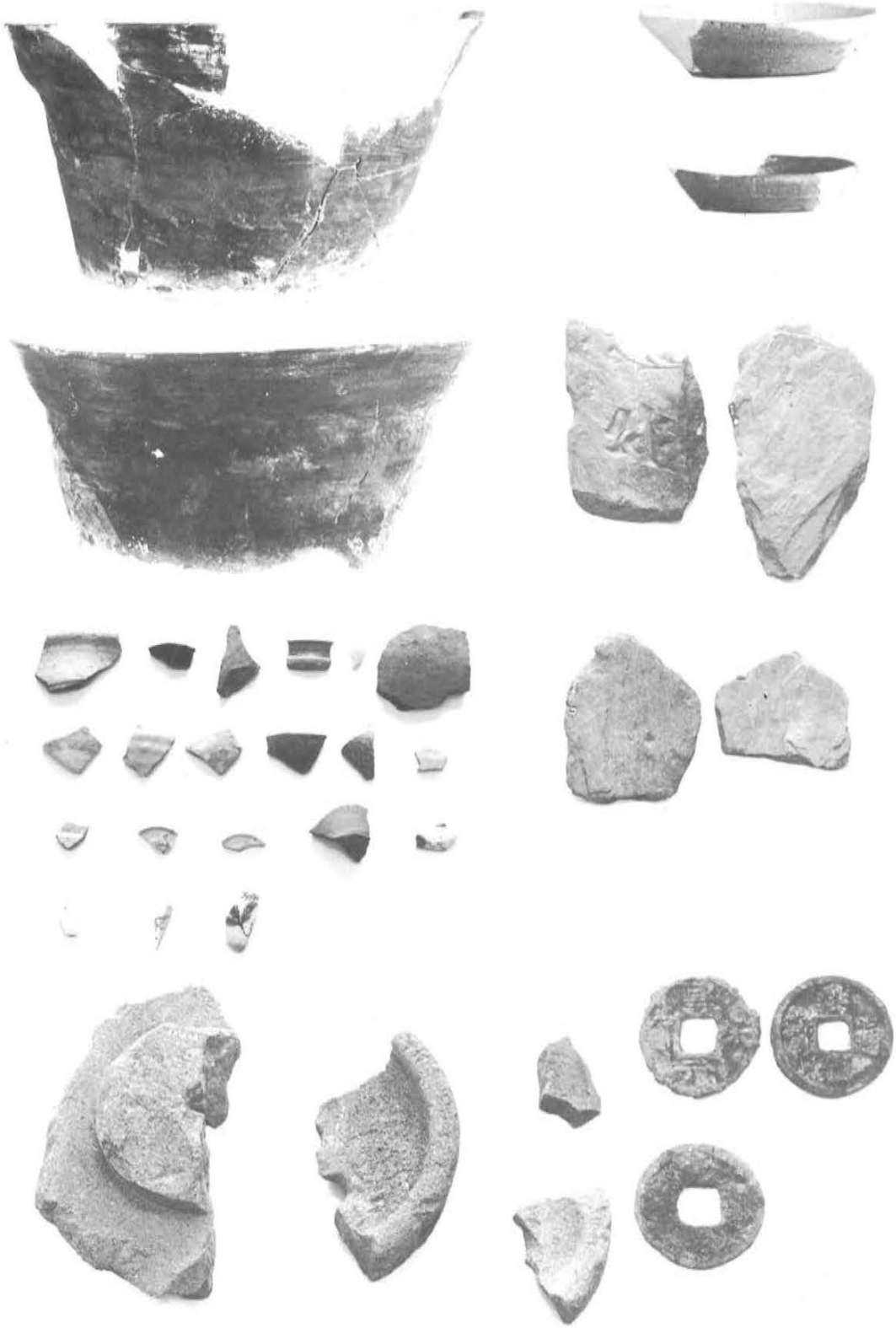
調査区出土土器

J－1号住居址
出土石器

調査区出土石器

調査区出土石器

図版—10



中 世 遺 物

発掘調査、遺物整理参加者

赤見　豊	新居　進子	井野　恵美	岩坂　尚子	内田喜美子
岡沢　順子	岡田早百合	片桐　佳子	川崎　弘子	小島タミエ
小林八重子	酒井美江子	酒井　理恵	斎藤　三枝	多胡　静
多胡　好夫	田島かつ子	田島　元治	田村　稲	長井トシエ
中川　京子	中村　美枝	西村ひさ江	西村　水子	根岸　甲
萩原喜美代	平尾　包	大和　房子	湯川　秀司	中島　誠

板鼻城遺跡

ー市道上町・小丸田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

発行日　昭和62年3月31日

編集　安中市教育委員会社会教育課

発行　安中市建設部土木課

群馬県安中市安中一丁目23ー13

印刷　マツダ印刷株式会社